

# 東洋文庫漢籍善本紹介

會 谷 佳 光

## はじめに

本稿は、筆者が二〇一一年度から二〇一九年度にかけて担当してきた、東京大学東洋文化研究所「漢籍整理長期研修」のために作成した研修用資料をもとに整理・加筆したものである。研修用資料の作成にあたっては、東洋文庫の蔵書の中から、鈔本、刊本（宋版・元版・明版・地方志・族譜）、套印本、高麗・朝鮮本、越南本、和刻本（春日版・五山版・古活字版・覆古活字本）について、それぞれ代表的、あるいは特徴的な資料をピックアップして、先行研究を参照しつつ、現物を実査して解題の作成を行い、毎年度、解題の見直しや紹介資料の入れ替え等を行ってきた。なお、「24」 「雪竇明覚大師語録」については、東洋文庫編『岩崎文庫の名品―叡智と美の輝き』（山川出版社、二〇二一年二月）の「雪竇明覚大師語録」の解説を執筆した際に行った書誌調査をもとに、今回追加調査を行って作成したものである。

東洋文庫の漢籍善本を調査し、改めて見つけ直すきっかけを与えてくださった東京大学東洋文化研究所の関係者の

皆様には心より御礼申し上げます。また、研修の中で展示・紹介した資料について、参加者よりご指摘ご教示をいただき、翌年度の研修に活用させていただくことも少なくなかった。ここに記して、深甚の謝意を表したい。

## 凡 例

例

- 一、書誌事項は、書名・巻数、編著者名、出版事項、冊数、請求記号、版式、内容構成、版心題、刊記、奥付、題簽題、印記（蔵書印）、書人、その他特記事項からなり、推測・補足した文字は「〔 〕」付きで記した。
- 一、書名は、原則として、第一巻の巻頭書名によった。第一巻に巻頭書名がない場合や、巻によって異なる場合等は、適宜、目録題・末題・版心題等に従った。
- 一、改行は「／」で表し、小字で記される文字は「へ」付きで記した。
- 一、書誌事項の後に、著者、書物の内容、出版・書写の経緯、流伝の状況、旧蔵者等について、参考までに簡略な解説を付した。

## 目次

### 【鈔本】

(1) 唐人雜鈔

(2) 永樂大典

(3) 外戚事鑑

(4) 南巡盛典

(5) 大清聖祖合天弘運文武睿哲恭儉寬裕孝敬誠信中和功德大成仁皇帝實錄（康熙帝實錄）

### 【刊本】

#### 〈宋版〉

(6) 雜阿含經

(7) 歷代地理指掌圖

(8) 文選

#### 〈元版〉

(9) 周易經伝集程朱解附録纂註

#### 〈明版〉

(10) 高僧伝

(11) 七経図

#### 〈地方志〉

- (12) 新寧県誌  
 〈族譜〉
- (13) 新寧県志
- (14) 新安程氏統宗世譜  
 【套印本】
- (15) 新安名族志
- (16) 選詩  
 【高麗・朝鮮本】
- (17) 杜工部集
- (18) 禪林宝訓  
 【越南本】
- (19) 芸文類聚
- (20) 大越史記外紀全書  
 【和刻本】
- (21) 地志類
- 〈春日版〉
- (22) 因明正理門論本
- 〈五山版〉
- (23) 緇林宝訓  
 〈古活字版〉
- (24) 雪竇明覺大師語録
- (25) 勸学文
- (26) 新雕皇朝類苑

(27) 六韜

(29) 群書治要

(31) 摩訶止觀科解

〔覆古活字本〕

(32) 列子虜齋口義

(33) 列子虜齋口義

(28) 帝鑑圖說

(30) 仏説不増不減經

【鈔本】

(1) 唐人雜鈔一卷

唐欠名輯 唐末鈔本 一軸 XI-0-1 敦煌文獻

無辺縦一三・九cm横八九・五cm、無界全六十二行字数不同、朱筆圈点・傍線あり。無題。改装錦繡表紙。題簽「唐人雜鈔 文徳元年」。

「楼」・「兄弟」・班固「東京賦」・張衡「西京賦」・唐興「寒松賦」・陸景「典語」・「東京離宮賦」・「莊子」・「孟子」等の文章を抄出するが、一貫性はなく、既存文獻に未見の文や異同が多い。本書は饒宗頤・榮新江・陳国燦三氏によってそれぞれ論及され、特に第五十二〜五十七行「旌節、文徳元年（八八八）十月十五日午時入沙州、押節大夫宋光庭、副使朔方押牙康元誠、上下廿人。十月十九日中館設後、廿日送。」の一文は、帰義軍時代の敦煌史料として榮新江氏に取り上げられた。また東京文化財研究所による赤外線撮影で、紙背に二行半約三十四字の辞賦らしき文章があること

が確認された。「唐人雜鈔」は旧藏者長尾雨山（名甲、字子生。一八六四～一九四二）の命名。京都の藤井齊成会有鄰館に帰した後、書肆を介して、当時東洋文庫研究員であった池田温氏の所有となり、二〇〇八年に東洋文庫に寄贈された。東洋文庫は世界各国に收藏される敦煌文献のマイクロフィルムを收藏するが、現物の所蔵は本書が初めてである。

【参考資料】

池田温「唐人雜鈔」について」（『東洋文庫書報』第41号、二〇一〇年三月）、「同（続）」（同42号、二〇一二年三月）

(2) 永樂大典二万二千八百七十七卷目錄六十卷 存六十三卷

明解縉等奉勅輯 嘉靖四十一年内府朱絲欄重鈔本 三十四冊 XI-3-B-26

卷五五四により書誌を記す。双辺縦三四・八cm横二二・一cm、有界八行十八字注文小字双行二十八字、三魚尾小黒口、句四声点。首「永樂大典卷之五百五十四（一東）」。版心題「永樂大典」。黄絹表紙。表紙の右上（正方形）・左上（長方形）に青紙を貼付し、その上に「一東／二百三十九」と墨書した黄絹と、「永樂大典（卷五百五十四／之五百五十六）」と墨書した黄絹題簽をそれぞれ貼付する。青紙は黄絹より若干大きいため青い縁取りとなる。每冊末の副葉に重録総校官・分校官・写書官の職銜・姓名を記す。

『永樂大典』は明の成祖永樂帝（在位一四〇二～一四二四）の勅命で永樂六年（一四〇八）に編纂された史上最大規模の類書である。『洪武正韻』（東洋文庫蔵本に洪武八年（一三七五）序刊本（XI-3-A-12）あり）の小韻の文字に従っ

て項目を立て、当時伝存していたあらゆる書籍を集めて収録した。一書全てを採録した書籍もあれば、ばらして採録した書籍もある。出典は朱筆で記され、墨筆の書名は孫引き文献である。原本は明末に焼失したといわれ、嘉靖四十年（一五六二）に鈔写された副本が清朝に受け継がれたが、清末の義和團事変で大部分が焼失し、残りは世界各地に分散した。一一〇九五冊中、現存するのは四百冊八百巻のみ。佚書を多く引用するため、しばしば輯佚に用いられる。東洋文庫が所蔵する巻については、本稿末の別表1【東洋文庫所蔵『永樂大典』リスト】の通り。

(3) 外戚事鑑五巻

明宣宗朱瞻基撰 宣徳元年内府朱絲欄彩色鈔本 二冊 XI-3-B-12

双辺縦二六・一cm横一六・六cm、有界九行十九乃至二十一字、双魚尾小黒口、無点。首宣徳元年（一四二六）「御製外戚事鑑序」、次「外戚事鑑目錄」、次「外戚事鑑卷之一」、以下至巻五。版心題「外戚鑑」。題簽題「御製外戚事鑑」。本書は、明の宣宗宣徳帝（在位一四二五〜三五）が歴代の外戚（皇后の親族）七十九人の事績を集めたもので、勸善戒惡の書として皇族に下賜された。善行を巻一至三、悪行を巻四・五に収め、外戚の小伝を記した後、その事績にまつわる場面を鮮やかな色彩で描く。

(4) 南巡盛典一百二十巻 存巻第二十至第二十二

清高晋等奉勅撰 清内府朱絲欄鈔本 文源閣四庫全書之一 一冊 XI-3-B-22 岩崎文庫

左右双辺縦二一・六cm横一四・四cm、有界八行二十一字、単魚尾白口、無点。首「欽定四庫全書／南巡盛典卷二十」、以下至卷二十二。版心題「欽定四庫全書 南巡盛典」。丹絹表紙。表紙左上に「欽定四庫全書（史部／南巡盛典（二十至二十二））」と墨書す。表紙裏に「詳校官主事（臣）丁楷」と墨書した黄色の付箋を貼付す。巻尾に総校官等の署名あり。

四庫全書は清の乾隆帝（在位一七三五～九五）の勅命により、中国全土に伝わるあらゆる書物を収集・整理して、乾隆四十七年（一七八二）に完成した世界最大の叢書で、全三千四百五十七部、約六千箱、約三万六千冊、約七万九千巻に及ぶ。これを中国の伝統的な分類法「四部分類」（本稿末の別表2『四庫全書』の四部分類）を参照）で分類し、四つの書庫「四庫」に収めた。すべて手書きで正本七セット、副本一セットが作成され、正本のうち文淵閣（北京・紫禁城）、文源閣（北京・円明園）、文津閣（熱河・避暑山荘）、文溯閣（瀋陽・盛京宮殿）の北四閣（内廷四閣）に収められたものは皇室・高級官僚が利用し、文匯閣（揚州・大観堂）、文宗閣（鎮江・金山寺）、文瀾閣（杭州・聖因寺行宮）の南三閣（江浙三閣）に収められたもの、及び副本（北京・翰林院）は民間の学者の利用に供された。本書は、咸豊十年（一八六〇）のアロー戦争で焼失した文源閣本の零本で、「天子古希」・「文源／閣宝」・「天主信人」・「円明／園宝」の朱印を捺す。内容は乾隆帝が乾隆十六年（一七五一）から三十年にかけて江蘇・浙江を巡幸した時の記録である。東洋文庫では、他に文源閣本『草廬集』百巻（存巻一至十、九冊）、文溯閣本『鯨背吟集』一卷（二冊）を所蔵する。

(5) 大清聖祖合天弘運文武睿哲恭儉寬裕孝敬誠信中和功德大成仁皇帝實錄三百卷 欠卷第一至第一百五十  
清乾隆初年勅撰 清內府朱絲欄鈔本 用卷第九十九至第二百一別鈔本補配 一百五十冊 XI-3-B-36 皇史宬  
旧藏本

双辺縦二五・九cm横一八・五cm (書型縦四四・八cm横二九・五cm)、有界九行十八字、無魚尾白口、句四声点(朱)。  
首「大清聖祖合天弘運文武睿哲恭儉寬裕孝敬誠信中和功德大成仁皇帝實錄卷之一百五十一／監修總裁官光祿大夫太  
保兼太子太傅保和殿大學士兼戶部尚書二等伯加四／級臣馬齊光祿大夫絳筵日講官起居注少保兼太子太保保和殿大學士  
仍兼／管吏部戶部尚書翰林院掌院事加二級又加一級臣張廷玉光祿大夫絳筵講／官太子太傅文華殿大學士仍兼理戶部尚  
書事務加五級又加二級臣蔣廷錫／總裁官光祿大夫文華殿大學士兼吏部尚書臣朱軾等奉／敕修」、以下至卷之三百。版心  
題「實錄」。題簽題「大清聖祖仁皇帝實錄」又別題簽「卷之一百五十一／康熙三十年四月／至五月」。五十帙(第五十  
一至第百函)、帙題簽「大清聖祖仁皇帝實錄」又別題簽「第五十一 三卷／康熙三十年四／月至十二月」。

帙・表紙・背とも朱絹を用いる。表紙の右上(正方形)・左上(長方形)に青絹を貼付し、その上にそれぞれ文字を  
記した朱絹題簽を貼付する。青絹は朱絹題簽より若干大きいため青い縁取りとなる。匡郭は印刷ではなく、一本一本  
手で引かれている。料紙を書写面が内側に来るように一枚一枚谷折りして、料紙の折り目と小口をそれぞれ幅数cm糊  
付けし、さらに本文の前後に二紙ずつ副葉を加えてある。これとは別に、厚様の料紙二枚を、一枚の朱絹で書背を覆  
うように貼り付け、前後の副葉をこの台紙に貼り付けて装訂されている。いわゆる「粘葉装」と呼ばれる装訂に近い。  
朱絹の意匠は、題簽・帙・表紙とも鳳凰と雲である。

本文は低一格で記され、皇帝等敬意を表する必要のある文字で抬頭する。卷第三百末の副葉第一丁表に「乾隆四年十月二十五日大学士三等／伯臣鄂爾泰臣張廷玉大学士臣徐本／等遵／（二格抬頭）旨増入恭加／（三格抬頭）尊諡」とあり、乾隆帝の命に遵って尊諡を増入した旨の書き入れがある。本文中、処々に朱筆で「胤禛」と記した黄絹が貼付され、黄絹の下は二字分空欄となっている。「胤禛」は、康熙帝（在位一六六一～一七二二）の第四子雍正帝（在位一七二二～三五）の名である。本来皇帝の名は避諱して欠筆等で処理するところ、乾隆帝の命で雍正帝の名を増入したのである。他の皇子の名にも「胤」字が用いられていたが、雍正帝が即位後「允」に改めさせたので、本書の中では皆「允」に作る。

「実録」とは、皇帝の没後、起居注（皇帝の左右に侍する史官が皇帝の言行を記録したもの）を中心とした文書や記録をもとに、皇帝一代の出来事を編年体で編纂した書物のことである。東洋文庫蔵本には康熙三十年（一六九一）四月から六十一年十一月までの出来事が記されている。清朝実録は、漢文五部・滿文五部・蒙古文四部の三種十四部あったことが知られている。このうち漢文五部は、装訂の違いによって、大紅綾本二部、小紅綾本二部、小黃綾本一部に分けられる。故宮博物院が現在所蔵しているのは小紅綾本であり、大紅綾本は明清代の公文書館である皇史宬、盛京崇謨閣にそれぞれ所蔵されていた。東洋文庫所蔵本は、これまで東洋文庫の初代理事長井上準之助（一八六九～一九三二）の時代に、北京の故宮からの流出本を購入したものとされていたが（光緒帝の実録全巻も同時に購入）、華麗な装訂を持つ大型の美本であり、かつ現在皇史宬旧蔵の大紅綾本を所蔵する中国第一歴史档案館に首三卷、卷第一至第五百十第百九十九至第二百一が所蔵されることから、実は皇史宬に所蔵されていた大紅綾本である。

まれに「録 漢（朱印）字 一百一（墨筆）号／聖祖仁皇帝実録第 六十一（墨筆）函／由 年至 年共 本／三 十六年三月至五月 三本（墨筆）」「漢（朱印） 第壹（墨筆）行（十／六）（墨筆） 箱貳（墨筆） 格 月（朱印）」（第 六十一函。ゴシックが墨刷）と印刷された付箋二種が挿入されている。「漢（朱印）字」は、満文の実録に対する漢文 の実録の意と見られる。皇史宬内での配架場所を示すものかもしれない。

なお巻第百九十九至第二百一の一帙三冊は、書型・版式・装訂が他巻とよく似てはいるものの、表紙の台紙が薄く、濃藍の絹が用いられ、意匠は雲のみで、帙留めの紐の色・意匠も異なり、爪は意匠こそ同じであるが、若干細い。本文は句点のみで四声点はなく、「胤禛」とあるべき箇所は空欄のままとなっている。東洋文庫に入る前に、欠巻の補充にあてられたものと考えられる。

### 【刊本】

〈宋版〉

（6） 雜阿含經五十卷 存卷第三十九

劉宋求那跋陀羅訳 紹聖三年福州東禪等覺院刊本 福州版大藏經之一 一帖 XI 1-22

天地単辺縦二四・七cm横一一・〇cm（一張六六・七cm）、無界一張六面每面六行十七字、無点。首「雜阿含經卷第三

十九 流／宋天竺三藏求那跋陀羅訳」。各張の折り目一箇所に千字文「流」・卷次・張次を刻す。刊記「福州東禪等覺院住持伝法沙門智賢謹募衆縁恭為／今上皇帝祝延 聖寿闔郡官僚同資祿位雕造／大藏經印板計五百余函 時紹聖三年

十月 日謹題」(巻首)。第十四張第四面至第十六張第六面は紙背に印刷される。末題次行に「詳対経弟子黄(端)／詳対経沙門(道)／都句当藏主沙門(集成)／同勸縁聖泉寺賜紫沙門(惠榮)／同句当住聖泉寺伝法沙門(紹登)／都勸首住持伝法沙門(智賢)／前都勸首住持伝法慧空大師(冲真)／証 会 靈 応 侯 王」とあり。印造記「東禅」福州東禅経／生林璋印造」。印記「月明荘」。帙題簽「北宋版雜阿含経(天籟題)」、また印記「青谷茂」あり。

「阿含」は、サンスクリット・パーリ語のアーガマ *Āgama* (「伝来」の意) の音写で、「代々伝承されてきた経」を意味する。阿含経典は初期仏教の経典であり、長阿含・中阿含・増一阿含・雜阿含の四経を「四阿含」と称する。このうち雜阿含経は、千三百六十二の経典を集めたもの。本書は福州版大藏経の一つで、北宋の紹聖三年(一〇九六)の刊記は東洋文庫の所藏する漢籍の中で最も年代の古いものである。唐末以来仏教が盛行した福建では、北宋神宗(在位一〇六七～八五)の時代に慧空大士冲真らの発願によつて福州の東禅等覚院で開版され、三十余年後の徽宗(在位一一〇〇～二五)の時代に完成した「東禅寺版」と、その完成と入れ替わるように本明禅師の発願によつて福州の開元禅寺で開版され、約四十年後の南宋高宗(在位一一二一～三五九)の時代に完成した「開元寺版」の二種の大藏経が刊行された。日宋・日元貿易により日本に伝来した多数の福州版大藏経のうち、現存すべてが両藏の混合藏であり、經典単位・巻単位・張単位の混合が数多く見られる。東洋文庫藏本は、中村菊之進氏旧藏。

(7) 歴代地理指掌図不分巻

宋(税安礼)撰 南宋初刊本 一冊 XI—1—3

双辺縦二二・一cm横一六・四cm、有界十五行二十六字注文小字双行三十九字、単魚尾白口、無点。首蘇軾「歴代地理指掌図序」、次「歴代地理指掌図目録」、次「古今華夷区域樞要図」他四十三図、次「樞論」。版心題「指掌」、版心上部にままた刻字数あり。刊記「西川成都府市西俞家印」（巻末）。印記「清見寺常住」「江風山／月荘」「福堂」「雲郵文庫」。なお版式は丁てごとに小異がある。

著者は蘇軾・税安礼・著者不明の三説があるが、北宋の税安礼の撰で、初め蜀で刊行されて流通し、のち書肆によって税安礼の名が削られ、蘇軾に仮託されるに至ったとする説が有力である。第四十四図「聖朝升改廢置州郡図」中の地名が紹興年間（一一三一～六二）初の状況を反映し、「樞論」中、欽宗（在位一一二五～二七）の諱「桓」を避けて「桓」字の末筆を欠く等、南宋紹興前期の刊本と見られる。

本書は現存最古の中国歴史地図集であり、帝嚳から宋代までの歴代地理沿革を図解した全四十四図及び総論を収載する。臨済宗妙心寺派の清見寺（静岡県静岡市興津清見寺町）の旧蔵で、明治大正期の書肆（山城屋佐助の分家）・政治家稲田政吉から、岩崎久弥（一八六五～一九五五）の和漢書収集の顧問であった和田維四郎（一八五六～一九二〇、号雲村）を経て東洋文庫に帰した。宋版は五・六種あったが、現在伝わるのは東洋文庫蔵本のみであり、商務印書館を主宰した張元済（一八六七～一九五九）によって『中華学芸社輯印古書』に収録される予定であったが、未刊に終わったようである。その後、一九八九年に『宋本歴代地理指掌図』（上海古籍出版社）に景印され、さらに『続修四庫全書』に再録された。

## (8) 文選六十卷目錄一卷

梁蕭統輯 唐李善等注 紹興二十八年跋明州刊通修本 改裝三十二冊(第二冊全丁白紙) XI 61 C 1

左右双辺縦二二・三cm横一四・七cm、有界十行十八字乃至二十五字注文小字双行二十九字至三十三字、単魚尾白口、無点。首梁昭明太子撰五臣并李善注「文選総目錄」、次顯慶三年(六五八)李善「李善上文選注表」、次開元六年(七一八)五臣「進集注文選表」、次梁昭明太子撰「文選序」、次「文選卷第一」梁昭明太子撰／五臣并李善注、以下至卷第六十、次紹興二十八年(一一五八)盧欽〔跋〕。版心題「文選」、版心下部に刻工名あり。無刊記。玄・法・炫・鉉・絃、敬・擎・警・驚〔敬〕部分の末筆)、弘・泓、殷、恒、貞、讓、勗、桓、桓、穀に欠筆あり。卷第三十六第五十一の第三丁丁付の上に「○」あり。卷第一第二十二丁欠。無印。裏打ちあり。目錄第一・三十一丁補鈔。卷第五十五第一丁表第十行・裏第一行の破損・裏打ち箇所補鈔あり。朱墨点、朱墨筆書入、青紙・赤紙による不審紙(青紙は上欄外、赤紙は本文内に貼付)、墨筆首書あり。各冊表紙左上に「文選 惣目」のように墨書す。第九冊のみ題簽を存す(父選(自十三／至十四)賦(書貼、中央))。

梁の昭明太子蕭統(五〇一〜五三二)が編纂した詩文集で、梁以前の約千年間に活躍した文人百数十人の詩文約八百篇を文体別に収録し、唐の李善と五臣の注が付された所謂「六臣注」本である。本書はもともと南宋の紹興二十八年に明州で出版されたものであるが、東洋文庫蔵本は版心下部にしばしば「某重刊」の文字が見え、版木の破損・劣化によって補刻された丁が大量に確認されることから、紹興二十八年明州刊本の通修本と見られる。足利学校遺蹟図書館所蔵の同版本は補刻葉が一丁もなく、国宝に指定されている。台湾の国立故宮博物院にも清の乾隆帝秘蔵の同版

本が伝わるが、印刷状態は東洋文庫蔵本の方がはるかに良い。重厚な作りの儉鈍箱に納められ、大切に伝承されてきたことが伺われる。

〈元版〉

(9) 周易経伝集程朱解附録纂註十四卷首一卷末一卷 即周易会通

元董真卿輯 至元二年翠巖精舍刊本 十六冊 XI 215

双辺縦二〇・〇cm横一二・四cm、有界十一行十九字注文小字双行二十二字、双魚尾小黒口、無点、有耳格。首董真卿「周易会通総目」、次天暦元年(二三三八)董真卿「周易経伝集程朱解附録纂註序」、次元統二年(一三三四)董真卿「周易会通凡例」、次「周易会通引用諸書群賢姓氏」、次董真卿「周易経伝歴代因革」、次「易程子伝序」、次「易程子序」、次「古易朱子後序」、次「易学啓蒙序」、次董真卿「程子説易綱領」、次同「朱子説易綱領」、次同「朱子易図附録纂註」、次「双湖胡先生易図」、次「周易経伝集程朱解附録纂註卷第一／後学鄱陽董真卿編集」、以下至卷第十四、次董真卿「朱子啓蒙五賛附録纂註」、次同「朱子筮儀附録纂註」。版心題「易会通」。木記「至元二年丙子／翠巖精舍新刊」(総目末)。題簽題「周易纂註」(書貼)。無印。

董真卿、字季真、鄱陽の人。胡一桂に学ぶ。易学には代々象数・義理の二家があり、門戸の争いがあったが、諸家の説を公平に採録した点に本書の特徴がある。大字で『周易』の経伝を記し、その割り注に「集解」(程子の伝・朱子の本義に取る)、「附録」(程子の経説・朱子の語録に取る)、「纂註」(胡一桂の纂疏に諸説を加える)を記し、本文の

耳格に卦名を刻す。董真卿の子僕が至元二年（一三三六）に翠巖精舎から刊行したものであり、覆刻本に洪武二十一年（一三八八）建安本務堂刊本がある。

〈明版〉

(10) 高僧伝十三卷目録一卷附音釈

梁釈慧皎撰 万曆三十九年径山寂照庵刊本 嘉興版大藏經之一 卷第九補鈔 全三冊 XI 31A146

双辺縦二三・〇cm横一四・五cm 有界十行二十字注文小字双行 無魚尾白口 無点。首扉絵、次〔偈〕〔皇図鞏固

帝道遐昌／仏日増輝 法輪常転〕、次「高僧伝序／梁會稽嘉祥寺沙門慧皎撰／…」、次「高僧伝目録」、次「高僧伝

卷第一／訳経上／…」以下至卷第十三、次釈慧皎〔跋〕、次釈僧果〔記〕。版心題「高僧伝」、千字文伊一至十、尹一

至四。木記「浮渡居士呉用先施資刻／高僧伝目録一卷三千七百五十四字該銀一／両八錢八分／宜城釈元鏡対長洲丘義

民書旌徳劉邦承刻／万曆辛亥歲（一六一一）□□月径山寂照庵識」（目録末）、その他の木記の記年は、卷第一第二第

五至七第十卷第十三跋尾が万曆辛亥夏四月、卷第三第四第十一が春三月、卷第八第十二が夏五月であり、補鈔の卷第

九は「万曆辛□□□四月」である（虫損）。印記「藤田鏡豊／臧書之記」。

梁の釈慧皎（四九七〜五五四）は、当時の僧侶の伝記が賛美に過ぎ、史実に乏しかったことから、名望のある僧侶ではなく、徳の高い僧侶の伝記を記そうとして本書を撰述した。後漢の永平十年（六七）から梁の天監十八年（五一九）までの四百五十三年間に活躍した高僧について、訳経・義解・神異・修禪・明律・亡身・誦経・興福・経師・昌

導の十科に分け、本伝二百五十七人、付伝二百四十三人の伝記を収める。東洋史学者藤田豊八（一八六九～一九二九、号劍峯）旧蔵。本書は、嘉興版大藏経の一つ。嘉興版大藏経は、万曆十七年（一五八九）頃、華北の五台清凉山紫霞谷妙徳庵で開版された大藏経であり、嘉興蔵・楞嚴寺版藏経・万曆蔵・密蔵本・径山蔵と呼ばれる。同二十一年、江南の杭州径山の興聖万寿禅寺寂照庵に移転して開版が続けられ、版木の保管・印刷は寂照菴（万曆三十八年に径山東麓の下院化城巷接待寺に移転）、装訂・販売は嘉興府秀水県の楞嚴寺の経房で行われた。崇禎十五年（一六四二）頃、正蔵二百十帙一千六百五十四部六千五百九十一巻が完成し、康熙五年（一六六六）、続蔵九十三帙二百八十七部二千三百三巻、康熙十五年（一六七六）頃、又続蔵四十七帙二百五十四部一千三百四十九巻が完成した。正蔵・続蔵・又続蔵合わせて二千百九十五部一万三百三十三巻におよび、他に首函として『刻蔵縁起』・『大明三蔵聖教目録』・『画一目錄』三部一函が附録される。従来の大藏経は、巻物・折本で装訂されたが、嘉興版大藏経は利用の便を考えて方冊本で装訂された。正蔵部分は永楽北蔵の正蔵・続蔵を底本に、宋元両蔵・永楽南蔵で校勘し、巻末に校譌・音釈・刊記を付す。日本には四十～五十セット伝来したと考えられており、黄檗宗の鉄眼禅師（一六三〇～八二）は嘉興版大藏経を覆刻した（黄檗版大藏経）。これが日本全国に普及したため、所謂「明朝体」の普及に大きな影響を与え、一紙二十行二十字計四百字の字詰めは原稿用紙のもととなったと言われている。

（11）七経図七巻

明呉繼仕輯 明呉懷忠等校 万曆四十三年序刊本 四冊 XI-6-A-6

単辺縦三五・八cm横二四・〇cm、有界行数字数不定、無魚尾白口、無点（以上「大易象数鉤深図」第二丁表による）。首万曆乙卯（四十三年、一六一五）焦竑「七経図序」、次万曆乙卯呉繼仕「七経図叙」、次「毛詩正変指南図目録」明新都呉繼仕考校、次「毛詩正変指南図」、次「尚書軌範撮要図目録」明新都呉繼仕考校、次「大易象数鉤深図」、次「春秋筆削発微図目録」明新都呉繼仕考校、次「春秋筆削発微図目録」纂、次「儀礼会通図」明新安呉繼仕公信甫編纂、次「礼記制度示掌図目録」明新都呉繼仕考校、次「礼記制度示掌図」、次「周礼文物大全図目録」明新都呉繼仕考校、次「周礼文物大全図」。版心題「毛詩」「尚書」「周易」「春秋」「儀礼」「礼記」「周礼」。無刊記。印記「□／□」「李／□／立」「徳□／□家」。

呉繼仕、字公信、徽州（今の安徽省黄山市）の人。他に『音声紀元』六卷の著作がある。『七経図』に先行するものとして、宋・楊甲撰、宋・毛邦翰補『六経図』や『五経図』があり、大いに流行したが、呉繼仕は毛邦翰補『六経図』を校正し、これに宋・楊復『儀礼図』を加えて万曆四十三年に本書を刊行した。大易象数鉤深図70図・尚書軌範撮要図55図・毛詩正変指南図45図・周礼文物大全図68図・儀礼会通図27図・礼記制度示掌図41図・春秋筆削発微図42図の全七篇<sup>548</sup>図からなる。「大易象数鉤深図目録」の二丁裏に凡例と校正者・蔵板者（「新都呉氏熙春樓蔵板」）の名を列記する。東洋文庫蔵本は、日本に入る前に朝鮮で八冊本から四冊本に改装されたらしく、七経の順序が錯綜している。表紙には朝鮮本特有の厚手の箔押表紙が用いられ、裏に朝鮮李懋輯『四礼纂説』（朝鮮活字版。東洋文庫蔵本はⅦ-1-1にあり）の零葉を貼り付けて補強してある。その書型の大きさ（縦四二・〇cm横二九・〇cm）もあり、一見朝鮮本

のように見えるが、『四庫全書存目叢書』經部第百五十冊所収の万暦版と同版本である。

〈地方志〉

地方志は、各地方の沿革・地理、当地出身者の科擧合格者や当地に赴任した官僚のリスト、伝記、文学作品などを記録した歴史資料である。地方志の編纂は、多くの場合、当地に赴任した知事を名目上の監修者として、当地の知識人が実際の資料の収集・執筆を担当した。『史記』をはじめとする正史などのメジャーな書物には出てこない人物の事跡や、詳細な地理情報などを知る上で非常に役立つ。東洋文庫は約三千部の地方志を所蔵し、世界有数の地方志コレクションとして、国際的に評価されている。

(12) 新寧県誌八卷

明沈文系纂修 万暦三十四年序刊本 三冊 II 11-B 1-148

双辺縦二二・三cm横一四・四cm、有界九行二十字注文小字双行、単魚尾白口、無点。首万暦丙午（一六〇六）董其昌「新寧県志叙」、次顧起元「新寧県志序」、次車大任「新寧県志叙」、次「新寧県志目錄」、次「修誌姓氏」、次「新寧県志卷之一」、以下至卷之八、次万暦丙午曹一夔「新寧県志後跋」、次陳東泗跋、次丙午沈文系「後叙（版心）」。版心題「新寧県誌」、版心下部に刻字数・繕写者名・刻工名あり。無刊記。

本書は新寧県（現在の湖南省邵陽市新寧県）の地方志である。この地は漢代の零陵郡夫夷県にあたり、宋の紹興年

間(一一三一～六二)にはじめて新寧県が置かれ、明代には湖広承宣布政使司宝慶府武岡州の属県であった。沈文系、字幼魚、江南華亭の人。本書の後叙に「公緒」の刻印がある。貢生(科挙の予備試験合格者の中から選抜されて国子監に入学した者)。万曆三十二年(一六〇四)、新寧県知事に着任し、県志を纂修した。本書は方輿・天文・地理・人事の四考からなり、方輿考に「全境之図」「城池之図」「県衙図」「学宮図」を載せる。

(13) 新寧県志三十二卷

清安舒原修 清張德尊纂修 道光三年序刊本 有補鈔 十冊 II111B11149

左右双辺縦一九・九cm横二二・四cm、有界九行二十一字注文小字双行、単魚尾白口、無点。首道光三年(一八一三)張德尊「重輯新寧県志序」、次嘉慶二十三年(一八一八)安舒「新寧県志原序」、次嘉慶二十三年蔣舒恵「新寧県志原序」、次「重修新寧県志卷之首姓氏」、次「新寧県志目錄」、次「新寧県志卷之一／新寧県知県(安舒原輯／張德尊重輯)」、以下至卷之三十二。版心題「新寧県志」。無刊記。「丘」「夷」「玄」「弘」「曆」を「邱」「彝」「元」「宏」「歴」に作り、「炫」「絃」「寧」に欠筆あり。欠葉多し。

安舒、満洲正白旗の人。八旗科挙の举人。嘉慶十七年、新寧県知事に着任して県志を纂修し、同二十五年衡陽県(湖南省衡州府)知事に転じた。張德尊、浙江省山陰県の人。举人。道光二年、新寧県知事に着任し、未刊に終わった安舒纂修の『新寧県志』の原板三百片を検して、みずから校訂増補して完成させた。本書は星野・建置沿革・疆域・城池・山川・水利・古蹟・田賦・戸口・学校・典礼・祀典・祠廟・兵制・武功・積貯・蠲恤・職官・官績・選舉・人物・

列女・芸文・風俗・物産・祥異・雜識の全二十七篇からなり、星野に「寧邑全境図」等全十八図を載せる。本書と万曆『新寧県誌』は東洋文庫にのみ現存し、一九九二年に書目文献出版社の『日本藏中国罕見地方志叢刊』に景印収録された。

#### 〈族譜〉

族譜は、各地の一族の沿革、伝記、家系図等を記録したもの。地方志と同様、正史等のメジャーな書物には出てこない人物の伝記や血縁関係・姻戚関係を知る際に非常に有用である。家系図を含むためか、大型の本が多い。東洋文庫は、約八百六十種の族譜を所蔵し、世界でも有数の族譜コレクションとして、国際的に評価されている。

(14) 新安程氏統宗世譜二十卷附世譜辨一卷附録二卷 欠卷第九至第二十

明程敏政纂修 成化十八年序刊本 四冊 XI 31A b 106

双辺縦二七・一cm横一七・四cm、有界十四行三十字注文小字双行、双魚尾小黒口、無点。首「新安程氏統宗世譜旧序」、次成化十八年（二四八二）程敏政「序新安程氏統宗世譜」、次「新安程氏統宗世譜卷之一」、以下至卷之八、次成化十八年程質「新安程氏統宗世譜後序」、次「新安程氏統宗世譜辨」、次「新安程氏統宗世譜附録上」、以下附録下。版心題「程氏統宗世譜」、版心下部にままた刻工名あり。無刊記。

程敏政、字克勤、直隸休寧の人。成化二年進士。官は礼部右侍郎に至る。著に『新安文献志』等がある。本書は、

明の成化年間（一四六五～八七）に奉訓大夫の程敏政が旧宗譜を集め、新安郡（現在の安徽省歙県）の程氏を中心に、天下の程氏四十四支派、五十三世、一万人余を収載したものである。卷一中山博野派三十三世には北宋の程顥・程頤の名が見え、附録の上巻にその墓図「宋明道伊川二先生祠」を載せる。

(15) 新安名族志二卷

明戴廷明等輯 明程尚寛等統輯 嘉靖三十年序安徽程氏等刊本 二冊 XI-3-A-b-107

単辺縦一九・〇cm横一四・二cm、有界九行二十字注文小字双行、無魚尾白口、無点。首嘉靖己酉（二十八年、一五四九）鄭佐「新安名族志序」、次嘉靖二十九年洪垣「同前」、次嘉靖辛亥（三十年）胡晁「同前」、次嘉靖辛亥邵齡「同前」、次嘉靖辛亥王諷「同前」、次嘉靖辛亥程光顯「同前」、次嘉靖辛亥程尚寛「新安名族志引」、次「新安名族誌凡例」、次「新安名族姓氏目錄」、次「新安名族志前卷」、次「新安名族志後卷」、次嘉靖辛亥吳守教「新安名族志跋」、次嘉靖庚戌（二十九年）朱瑩「名族志跋」。版心題「名族志」。無刊記。

名族志は大族志・名族譜ともいい、南北朝以降盛んとなった氏族志や望族譜の流れを組む。元明以降は各地域の宗族に限定して民間で自由に作成されるようになり、各地の望族の序列形成に強い影響力があった。原本が伝わるのは新安（現在の安徽省南部）の名族志のみで、本書もその一つである。休寧の戴廷明等が約十年の歳月をかけて元・陳櫟輯『新安大族志』二巻を増補して、嘉靖二十八年に完成したものを、程尚寛等が宗族の序列化色を薄めて、嘉靖三十年に続補刊行したものである。

【参考資料】

多賀秋五郎 『宗譜の研究 資料篇』 (『東洋文庫論叢』第45、東洋文庫、一九六〇年)

多賀秋五郎 『中国宗譜の研究』 (日本学術振興会、一九八一〜八二年)

【套印本】

数種類の色を使って重ね刷りした版本を套印本と呼ぶ。元代に起こり、明代の後半、評点本の流行とともに盛んとなった。呉興の閏齊俊に始まる閏刻本と、凌濛初に始まる凌刻本が有名。匡廓の四隅に、色刷り用の版木を匡廓に合わせるための目印のカギ印(見当)があることが多い。

(16) 選詩七卷詩人世次爵里一卷附訂註 即合評選詩

梁蕭統輯 明郭正域批点 明凌濛初輯評 明凌濛初刊朱墨套印本 六冊 XI 3-1-A 1-124

单边縦二〇・四cm横一三・九cm、無界八行十八字注文小字双行、無魚尾白口、句点、傍点傍注傍線、首書。首凌濛初「輯諸名家合評選詩序」、次「凡例」、次「批評選詩名公姓氏」、次「詩人世次爵里」、次「選詩目錄」、次「選詩卷一」(江夏郭正域批点)／呉興凌濛初輯評)／梁昭明太子蕭統選)、以下至卷七、又每卷後有「訂註」。版心題「選詩」。無刊記。印記「咽篆」。

凌濛初(一五八〇〜一六四四)、字初成・稚成、烏程(今の浙江省湖州市)の人、号玄房・即空觀等。他に『聖門傳

詩嫡家』十六卷の著作がある。本書は、凌濛初が『文選』の詩甲から詩庚までの七篇を七卷に改め、郭正域（一五五四～一六一二、万曆十一年（一五八三）進士）の『文選批評』に従って批点を加え、さらに六臣注を始めとする先人の注釈・評語を加えて、本文を墨刷り、批点・評語（句点・傍点・傍注・傍線・首書）を朱刷りで刊行したものである。

(17) 杜工部集二十卷首一卷

唐杜甫撰 明王世貞清王士禎等評 道光十四年刊六色套印本 八冊 XI 31 A 1 d 50

左右双辺縦一七・六cm横一二・四cm、無界八行二十字注文小字双行、双魚尾小黒口、句点、傍点傍線傍注、首書。首道光甲午（十四年、一八三四）盧坤「序」、次「杜工部集卷首」、次「杜工部集卷一」、以下至卷二十。各巻巻前に目録あり。内封題「杜工部集」又「道光甲午季冬」「芸葉盒藏板」等とあり。版心題「杜集」。無刊記。「玄」「曆・歴」を「元」「歴」に作り、「丘」「玄」「弦」「眩」「絃」に欠筆あり。印記「毓室／函書」（内封右下）「仰天／樓／主人」「富／卿」「小田切／富卿」「田印／盛大」。

本書は、道光十四年に両広総督の盧坤が家蔵の五家合評杜工部集二十巻を底本に、評者ごとに色分けして刊行したものであり、「五家評本」の名で知られる。盧坤は道光十三年に『為政忠告』三種の序文を書き、その景鈔本を底本に芸葉軒で重刊している。よって本書の内封に見える「芸葉盒」は「芸葉軒」ともいい、盧坤と関係の深い人物または書肆であったか、もしくは彼自身の号であったと考えられる。紫筆は王世貞、藍筆は王慎中、朱墨筆は王士禎（原名

士禎）、緑筆は邵長蘅、黄筆は宋肇の評点・評語であり、六色刷りは珍しい。外交官・銀行家で、東洋文庫の初代監事を務めた小田切万寿之助（一八六八～一九三四）旧蔵。なお本書には光緒二年（一八七六）粵東翰墨園刊の五色套印本もある（東洋文庫蔵本IV-21B-95）。

【高麗・朝鮮本】

高麗時代（九一八～一三九二）に出版された版本および鈔本を、高麗本と呼ぶ。宋・元刊本の覆刻を多く行つたが、伝存は稀である。高麗は仏教を尊崇したため、仏典の出版が盛んであつた。

李朝時代（一三九二～一九一〇）は、活字印刷が盛んであり、中央官版では金属活字、地方官版と民間では木活字が用いられた。これを朝鮮活字版と呼ぶ。出版全体から見れば活字版はその一部にすぎず、整版が多かつた。朝鮮活字は豊臣秀吉（一五三七～九八）の朝鮮出兵により日本にもたらされ、古活字版の隆盛の契機となつた。李朝では、高麗時代に篤信された仏教を排斥し、朱子学が信奉された。仏典以外は刊記が少なく、刊年の推定が難しい。

朝鮮綴じ。朝鮮本などの大型の本の装訂に用いられるもので、袋綴じで綴じ穴が五つあるもの。漢語では五針眼訂法と呼ぶ。中国や日本では普通四つ眼綴じが用いられるが、朝鮮本には大型本が多く、表紙も白紙が裏打ちされて分厚いため、綴じ穴が一つ多く、糸も比較的太い。

## (18) 禅林宝訓二卷

宋釈浄善重輯 宋釈妙機校証 北元宣光八年(高麗辛禩四年) 跋忠州青竜禪寺刊本 有補鈔 二冊 XI-4-A-5

左右双辺縦一八・〇cm横一二・四cm(下辺補鈔)、有界十行二十字、双魚尾線黒口、無点。首「禅林宝訓卷上/東呉沙門浄善重集」、以下卷下、次甲午(至元三十一年、一二九四) 釈永中(識語) 又「板留長蘆禪寺印行」又「安慶府太平興国禪寺住持嗣祖比丘妙機校証」とあり。次壬寅(淳熙九年、一一八二) 尤袤「二絶敬跋天池善老宝訓集後」、次釈浄善(跋)、次宣光八年(北元の年号、一三七八) 釈混修(跋)、又跋後に「板留忠州青竜禪寺」とあり。版心題「訓」。無刊記。墨筆書入あり。又釈混修(跋)の後に嘉靖二十二年(一五四三) 墨筆識語あり。

本書は、臨済宗楊岐派第五世の大慧宗杲(一〇八九〜一一六三)と竹庵士珪が先徳の語録の中から禅学研修の要諦を集めたものを、東呉の釈浄善が再編集して三百余篇にまとめたもので、淳熙年間(一一七四〜八九)に完成した。

「禅門宝訓」ともいう。東洋文庫蔵本は、高麗末期の辛禩四年(洪武十一年、北元・宣光八年)に高麗の釈混修(字無作、号幻庵、一三二〇〜九二)が至元三十一年釈永中真州長蘆禪寺刊本を底本に重刊したものである。

## (19) 芸文類聚一百卷

唐欧陽詢輯 朝鮮掬正徳十年序華氏蘭雪堂銅活字印本重活字印 四十五冊 XI-4-B-19

単辺(ままだ双辺あり) 縦二〇・八cm横一四・七cm、有界十二行十九字注文小字双行、双花魚尾小黒口、無点。首欧陽詢「芸文類聚序」、次「芸文類聚目錄」、次正徳乙亥(十年、一五一五) 華鏡「蘭雪堂重印芸文類聚後序」、次「芸文

類聚卷之第一／唐太子率更令弘文館／学士渤海男歐陽詢撰」、以下至卷之一百。版心題「芸文類聚」。原刊記「正徳乙亥冬長至日蘭雪堂華堅活字銅／版校正印行」（卷第一百末）。印記「宣賜／之記」「養安院藏書」「養／安」「木正／辞／章」。第二冊見返しに「嘉靖三十一年三月 日／内賜前承政院右副承旨朴忠元芸文類聚一件／命除謝／恩／右承旨臣洪（花押）」との墨筆識語あり。

本書は、唐の武徳七年（六二四）、歐陽詢等が高祖の勅を奉じて編纂したもので、『北堂書鈔』『初学記』『白氏六帖』とともに「唐代四大類書」の一つに数えられる。錫山（今の江蘇省無錫市）の華鏡が家藏の鈔本に脱語が多いのを憂い、金昌袁氏所藏の宋版によつて校勘し、正徳十年に華堅の蘭雪堂で印行した。なお華堅の蘭雪堂は他に『春秋繁露』十七卷等を銅活字で印行している。東洋文庫藏本は、李氏朝鮮で華堅蘭雪堂本（十四行十三字）を重印したものであり、内賜記によれば、嘉靖三十一年（一五五二）、つまり李朝の明宗七年に前承政院右副承旨朴忠元に下賜された。江戸時代に代々幕府の医官を務めた曲直瀬養安院家の旧藏本で、『経籍訪古志』卷五に著録される。養安院家初代曲直瀬正琳（一五六五〜一六一一）は、文禄四年（一五九五）に宇喜多秀家の妻の奇病を治癒した謝礼として、豊臣秀吉から文禄の役で得た書物数千巻を与えられたという。本書もその一つと見られる。幕末明治の国学者木村正辞（一八二七〜一九一三）の旧藏。

【越南本】

ベトナム人の手になる漢文、および漢字と字喃を交えて書かれた書籍を、越南本・漢喃本（カンナン・ハンノム）・

安南本と呼ぶ。ベトナムには十五世紀に中国の印刷術がもたらされ、出版活動が興った。

越南本は、官版・坊刻とも題簽を付さないものが多く、表紙・裏表紙には安南紙の反故を貼り合わせて柿渋を塗り込んだものを使った。濃褐色に染まった表紙には、虫害や湿気から書籍を守る効果があった。

(20) 大越史記外紀全書五卷附越鑑通考総論一卷

後黎朝呉士連等輯 附録黎朝黎嵩撰 正和十八年序刊本 一冊 Y1X1214

双辺縦二〇・一cm横一三・八cm、有界九行十九字注文小字双行、無魚尾白口、無点、首書。首正和十八年（一六九七）「史記統編序」（版心。首欠）、次景治三年（二六六五）范公著「大越史記統編書」、次洪徳十年（一四七九）呉士連「大越史記外紀全書」（版心「序」、次洪徳十年呉士連「擬進大越史記全書」、次「纂脩大越史記全書凡例」、次「大越史記紀年目錄」、次洪順六年（一五一四）黎嵩「越鑑通考総論」、次「大越史記外紀全書卷之一／朝列大夫国子監司業兼史官修撰臣／呉士連編」、以下至卷之五。版心題「大越史記全書」。刊記「梓人紅蓼柳幢等社人奉刊」（史記統編序末）。印記「□／□」「山本達郎／蔵書記」。朱筆書入あり。卷四第一丁を書き、卷五の第二十二丁以降に錯丁・欠丁あり。

本書は、洪徳十年、後黎朝の聖宗の命を受けて史臣呉士連が編輯した、漢文で書かれた編年体のベトナム正史で、本来は『大越史記全書』十九卷『越鑑通考総論』一卷『外紀』五卷で一セットであるが、本文十九卷を欠く。『外紀』は、建国神話から十二使君の乱（九六五～九六七）までを記す。料紙の影響か墨の影響か、越南本には本書のように

灰色がかった墨色の刊本が多い。故山本達郎博士寄贈本の一つ。

(21) 地志類五卷 即大越地輿全編

阮朝阮文超輯 成泰十二年刊本 有補鈔 五冊 X-21-26

単辺縦一八・八cm横一二・六cm、有界八行二十字注文小字双行字数不定、単魚尾白口、無点。首成泰十二年「大越方輿志序」、次「地志類卷之一／寿昌居士方亭輯」、以下至卷之五。封面題「大越地輿全編」又「寿昌居士方亭輯」。版心題「方亭地志類」。刊記「成泰庚子季秋新鐫」(封面)。

阮文超(一七九九〜一八七二)、字遜班、号方亭・寿昌居士。本書は、阮文超が『漢書』地理志を初めとする中国の文献や、古今のベトナム地誌を使って、ベトナムの地理・沿革について記したもので、成泰十二年(一九〇〇)に刊行された。越南本の特徴的な装訂が施されている。

### 【和刻本】

〈春日版〉

奈良の興福寺で平安末期から江戸時代にかけて開版された版本を、春日版と呼ぶ。興福寺は藤原氏の氏寺、春日社はその氏神であり、春日大明神は法相宗擁護の神である。興福寺の出版物の刊記にしばしば「春日神恩」「春日靈威光」等の語が見えることから「春日版」と呼ばれる。

平安時代は『成唯識論』等の法相宗関係の仏典を主に刊行したが、鎌倉時代にはその他の経論疏を幅広く刊行するようになった。今も興福寺には鎌倉時代の版木が多く伝存する。

(22) 因明正理門論本一巻

唐釈玄奘訳 貞応元年〔奈良興福寺〕釈弘睿刊本 一軸 二一C一b一 岩崎文庫

無辺書型縦二六・三cm全長八一・二・七cm(全二十紙、他表紙一八・九cm、末紙九・〇cm)、無界毎紙二十乃至二十一行(第一紙十八行)十七字、無点。首「因明正理門論本一巻 大域龍菩薩造 沙門玄奘奉 詔訳」。刊語「沙門弘睿蒙 満寺衆命造正理論摸矣。貞応壬午(元年、一二二二)中夏下旬彫刻功畢。」(卷末)、又刊語末に「願繼応理宗法命 久 増春日靈威光 遠生有情類慧解 皆共必得竜華益」とあり。印記「福／堂」「雲邨文庫」。表紙に「因明正理門論 実 英」墨筆書入あり。墨筆校異、朱筆書入あり。

インドの仏教論理学者陳那(デイクナーガ、「域龍」とも訳す。四八〇〜五四〇頃)の著作。サンスクリット原典は散佚し、玄奘(六〇二〜六六四)による漢訳のみ現存する。東洋文庫蔵本は、鎌倉時代の貞応元年に奈良の興福寺で釈弘睿によって刊行された春日版であり、弘睿版とも呼ばれる。春日版のなかでも鎌倉時代のもは質量ともに優れ、厚手の料紙・漆墨の墨色・力量感あふれる書風に特色がある。稲田政吉の旧蔵で、和田維四郎を経て岩崎文庫に帰した。

〈五山版〉

中世に臨濟宗の五山を中心に僧俗の關係者によって開版された出版物を、五山版と呼ぶ。鎌倉中期に始まり、南北朝・室町時代に盛んとなり、室町末期まで続いた。鎌倉時代はほとんど禪籍であったが、南北朝以降、漢籍や日本撰述の禪籍も刊行されるようになった。

宋・元・明の冊子本を整版覆刻し、附訓本は稀である。五山版に書き込まれたレ点等の訓点は、近世の附訓本のもとなつた。

(23) 緇林宝訓一卷

〔宋釈沢賢〕撰 鎌倉末期刊本南北朝補刊 一冊 二一B一b一90 岩崎文庫

左右双辺縦二〇・五cm横一五・〇cm、有界九行十六字、単魚尾線黒口、無点。首「緇林宝訓目錄」、次「緇林宝訓」。版心題「緇」。無刊記。印記「于水／艸堂／之印」「日本／国王／之印」「太宰／大貳」「苔香／山房／之印」「雲邨文庫」。見返しに「緇林宝訓 一冊／高麗末カ朝鮮始ノ刊本／巻首日本国王之印、巻尾太宰大貳ノ大朱章ヲ捺ス／纂照善隣国宝記、巻尾／杉聴雨居士読了ノ記アリ」と記した墨筆付箋（「福／堂／聚／英」（朱円印））を添付す。巻首副葉裏に「寛文四年甲辰／六月中旬武江／幕下山田迷軒／修造之 仍為後／日 如件」墨筆識語（「峻斎臧書」茶方印）、目錄末に「人皇九十二代後伏見天皇／御宇正安二（庚／子）曆開版五山／本」朱筆書入、巻尾副葉に「癸未九月十日□晚／読了 聴雨居士」（聴雨／居士）朱印）墨筆書入あり。朱墨筆書入あり。

本書は、禪の修行に役立つ先人の訓戒を集めたもの。中国には伝わらず、日本の五山版と寛永十六年（一六三九）刊本のみ伝わる。第十七丁～第三十二丁が鎌倉末期の原刻で、その他は南北朝頃の補刻とされる。目録に捺される「日本／国王／之印」印は、明の永楽帝が室町幕府第三代將軍足利義満（在職一三六九～九五）に「勘合」（入貢船の渡航証明書）とともに与えたと伝えられる。金印だったが、戦乱で失われ、木造印が作られた（毛利博物館蔵）。巻尾に捺される「太宰／大貳」印とともに、戦国時代の武将大内義隆（一五〇七～五一）が蔵書印として用いた。本書もその一つ。寛文四年（一六六四）に山田迷軒なる人物によって補修され、旧山口藩土杉重華（一八三五～一九二〇、号聽雨）、俳人・実業家木村素石（一八三七～一九〇三）、稲田政吉等の手に渡り、和田維四郎を経て東洋文庫に帰した。

〔24〕明州雪竇明覚大師開堂語録一卷雪竇和尚明覚大師瀑泉集一卷雪竇和尚住洞庭語録一卷雪竇和尚後録并歌頌一卷雪竇和尚拈古一卷雪竇頤和尚明覚大師頌古集一卷慶元府雪竇明覚大師祖英集二卷

宋釈重顯撰 開堂語録宋釈文軫録 宋釈傳宗校 瀑泉集宋釈円応述 洞庭語録宋釈惟蓋輯 後録宋釈子環輯 拈古

宋釈允誠思恭輯 頌古宋釈遠塵輯 正応二年京都東福寺刊本室町補刊 有補鈔 二冊 二一B一b一34 岩崎文庫

単辺（一部左右双辺）縦一七・九cm横一二・〇cm、無界（一部有界）十一行二十字、単魚尾白口、無点。首「明州

雪竇明覚大師開堂語録（并序）：曾会述／：天聖四年九月一日／門人文軫録／杭州承天寺住持賜紫嗣法弟子（傳宗）

校勘立板」、次「雪竇和尚明覚大師瀑泉集（并序）／參学小師円応述／：時天聖八年八月十五日序」、次「雪竇和尚住

洞庭語録／參学小師惟蓋集」、「雪竇和尚後録（并序）／參学小師子環集／：如玉謹序」、十七丁表至二十丁表に「謫

頌」あり（末題「統添雪竇語録并歌頌」、次開禧元年（一二〇五）徳□〔題〕、次「雪竇和尚拈古／參学小師允誠忠恭集序」、次「雪竇頌和尚明覚大師頌古集序／…／參学小師遠塵集」、末題後に「參学仙都沙門（簡□（虫損）校勘」とあり、次「慶元府雪竇明覚大師祖英集上／參学小師文政序／…歳時／□（虫損）宋天聖十年孟陬月謹序」、次「慶元府雪竇明覚大師禪英集下」、末題前行に原刊記「四明洪拳刊」あり。版心題「語録」「雪」「雪二」「洞」「洞庭」「語録後」「拈古」「頌古」「英」。刊記「明覚大師語録雖伝来年久曾／無人開板今命工鏤梓欲流通／将来伏願 皇風永扇祖道重興矣 時正応二年仲春下旬／三聖住持比丘（湛照）謹記／奉行知蔵（師元）」（「雪竇頌和尚明覚大師頌古集」二十九丁表）。印記「洒竹文庫」「蔵／書／鑿一冷香／惠林／南豊」「吟風／弄月」。朱点書入、又、祖英集に墨筆による訓点書入あり。又、「明州雪竇明覚大師開堂語録」（題）右欄外に「芳春常住二冊内」墨筆書入、「雪竇和尚住洞庭語録」（題）「雪竇和尚拈古」「慶元府雪竇明覚大師祖英集上」各一丁表上欄外に「万勝寺」墨筆書入あり。「雪竇和尚明覚大師瀑泉集」十八至二十四丁（江戸初期）補鈔、又二十丁表「明州雪竇山資聖寺第六祖明覚大師塔銘／…呂夏卿撰」、又塔銘末に「雪竇住山・童行 祖栄 同慕縁／守常 勸縁／四明徐汝舟刊」とあり。下冊の〔題〕二丁裏の料紙の変色具合や虫食いの跡は「雪竇和尚拈古」一丁表と一致せず、上冊「雪竇明覚大師開堂語録」一丁表と酷似している。このことから、全冊に裏打ちを施して二冊に改装した際、巻首にあった序題を誤って下冊に綴じたことがわかる。

本書は、雲門宗の雪竇重頌（九八〇～一〇五二）の語録で、開堂語録・瀑泉集・洞庭語録・後録・歌頌・拈古・頌古・祖英集からなる。下巻の「雪竇頌古」は臨済宗楊岐派の圓悟克勤（一〇六三～一一三五）によって評釈が付され、臨済宗第一の書と呼ばれる『碧巖録』を生み出し、日本の禅文学にも大きな影響を与えた。また「祖英集」は日本で

詩文の理想として親しまれ、江戸時代に単行本（慶安三年（一六五〇）刊本）も出版された。下冊「頌古」末に三聖寺の東山湛照（一二三二～九一）が正応二年（一二八九）に刊行したとある。三聖寺は京都にかつてあった寺院で、浄土僧十地坊覺空によって開山され、弘長元年（一二六一）、同門の湛照とともに、東福寺開山円爾弁円（一二〇二～八〇）のもと臨濟宗に帰し、文永四年（一二六七）、湛照が三聖寺の住持となると、東福寺に属することとなった。湛照のちに円爾を継いで東福寺二世となり、三聖寺に退隠してからは、日本仏教史書『元亨釈書』等を著した虎関師鍊（一二七八～一三四六）をはじめ、五山文学を牽引する人材を育成した。東福寺は天龍寺・相国寺・建仁寺・万寿寺とともに京都五山の一つ。東洋文庫蔵本は、東福寺二世の湛照が退隠後に三聖寺で刊行したもので、本書の五山版としては現存唯一の完本であるが、補刻された丁が非常に多い。原刻部分は摩滅が甚だしく、頌古十一至十二丁・祖英集上十九至二十一丁はほとんどの文字が墨筆で補写されている。

#### 〈古活字版〉

近世初期の木活字を古活字と呼び、近世後期の木活字を近世木活字と呼んで区別する。古活字版の印刷手法は外来のものである。一つは朝鮮銅活字であり、豊臣秀吉の朝鮮出兵により、日本にもたらされた。もう一つは天正十八年（一五九〇）にもたらされた西洋式活字印刷機であり、九州でキリスト教関係書が出版された。

古活字版には、天皇による文禄・慶長・元和勅版、徳川家康（一五四二～一六一六）の命による伏見版・駿河版、本国寺・比叡山・高野山などによる寺院版、医師による出版、本阿弥光悦（一五五八～一六三七）による嵯峨本、宗

存・天海による大藏經の刊行などがある。近世初期の約五十年間に隆盛したが、大量印刷に向いていなかったため、読者層が広がり、出版業が成立するようになると、もとの整版印刷に取って代わられた。

(25) 勸学文一卷

慶長二年後陽成天皇古活字印本 一冊 三十一A一八 岩崎文庫

左右双辺縦二五・一cm横一六・二cm、有界八行十七字、三魚尾小黒口、無点。首「勸学文」全五丁。版心題「勸学文」。刊記「命工每一梓鏤一字碁布之一版印之／此法出朝鮮甚無不便因茲摸写此書／慶長二年八月下濳」(卷末)。印記「後陽成帝勅版」「木邨／正辞／函書」「雲邨文庫」。題簽題「勸学文」(「後陽成帝勅版」印、ハガレ)。改装。原装副葉に「上ヨリ 時直ニ拝領 慶長二年八月廿六日」墨筆書入有り。

本書は、『魁本大字諸儒箋解古文真宝』前集卷上の初めに収載される「勸学文」八篇を別行させたものである。後陽成天皇(在位一五八六～一六一一)の勅命により印行されたもので「慶長勅版」と呼ばれる。慶長勅版全十四点のうち三番目となる慶長二年(一五九七)八月に刊行された。卷末の刊記には朝鮮の印刷法にならったとの一文が見える。木村正辞の旧蔵で、和田維四郎を経て東洋文庫に帰した。

(26) 新雕皇朝類苑七十八卷卷第目錄十四卷

宋江少虞撰 元和七年後水尾天皇執紹興二十三年麻沙書房刊本古活字印 十五冊 三十一A一〇二 岩崎文庫

双辺縦二二・二cm横一六・六cm、無界十三行二十字注文小字単行、双魚尾小黒口、無点。首紹興十五年（一一四五）江少虞「皇宋事宝類苑序」、次汪俣「皇宋事宝類苑後序」、次「皇朝類苑総目」（総目原欠あり）、次「麻沙新雕 皇朝類苑卷第目錄一」、以下至卷第目錄十四、次「新雕 皇朝類苑卷第一」、以下至卷第七十八、次元和七年（一六二一）前南禅寺釈瑞保「皇朝類苑跋」。版心題「皇朝」。無刊記。原刊記「紹興二十三年／癸酉歲中元日／麻沙書房印行」（卷第目錄三末）。印記「後水尾院勅版」「白雲書庫」「必端堂／図書記」「島範／□蔵／万卷」「勿折角勿卷腦勿以／墨汚勿令鼠齧勿唾／幅掲勿爪字抓勿跨／帙或作枕勿不如奉／師教勿粥市及借人／勿違命為不孝必端／野父題以囁兒元徽」「江山／月莊」「福堂」「雲邨文庫」。朱墨筆書人あり。

本書は、南宋の江少虞の撰した類書で、祖宗聖君以下、全二十八門に分類し、宋代の遺文・逸事を収載する。本版の底本は紹興二十三年（一一五三）麻沙刊の七十八巻本であるが、中国には『四庫全書』所収の六十三巻本が伝わるのみで、七十八巻本は伝わらない。後陽成天皇の印刷事業を継承した後水尾天皇（一六一一〜二九）によって木活字を用いて印行されたもので、唯一の「元和勅版」である。跋文を書いた有節瑞保（一五四八〜一六三三）は、臨濟宗の僧で、京都南禅寺を経て、慶長十二年（一六〇七）、相国寺鹿苑院に入り僧録となった。東洋文庫蔵本は、江戸時代前期の医者野間玄琢（一五九〇〜一六四五）・三竹（一六〇八〜七六）父子（白雲書庫）、江戸時代中後期の篆刻家・蔵書家小島必端（一七四六〜一八一〇）、明治大正期の書肆・政治家稲田政吉等の手に渡り、和田維四郎を経て東洋文庫に帰した。

(27) 六韜六卷

慶長九年徳川家康古活字印本 二冊 三A1k15 岩崎文庫

双辺縦二二・〇cm横一五・七cm、有界八行十七字注文小字双行、双花魚尾小黒口、無点。首「六韜卷第一」、以下至卷第六、次慶長九年（一六〇四）積元佶〔跋〕。版心題「六韜」。無刊記。題簽題「六韜」（書貼）。印記「立／岩／氏」  
「風月／場／珍臧」「伊佐早兼／古書之室」「雲邨文庫」。帙裏に大正四年（一九一五）伊佐早謙墨筆識語あり。

本書は、周の太公望呂尚の撰と仮託される兵法書で、文韜・武韜・龍韜・虎韜・豹韜・犬韜の六卷からなり、富国強兵の策を説く。徳川家康が慶長四〜十一年（一五九九〜一六〇六）にかけて、伏見円光寺の閑室元佶（一五四八〜一六一二）に十万個の木活字を与えて印行させたもので、「伏見版」と呼ばれる。米沢市の郷土史家伊佐早謙（一八五七〜一九三〇）の旧蔵で、和田維四郎の手を経て東洋文庫に帰した。

(28) 帝鑑図説二卷

明張居正呂調陽奉勅撰 慶長十一年跋豊臣秀頼撰万曆中刊本古活字印 有補鈔 六冊 三A1i19 岩崎文庫

双辺縦二二・〇cm一四・五cm、有界九行十九字、双花魚尾小黒口、無点。首万曆癸酉（元年、一五七三）陸樹声「帝鑑図説叙」、次隆慶六年（一五七二）張居正等「進図疏」、次「目錄」（版心「前目錄」）、次「聖」（版心）、次「任賢図治」（挿絵）、次「前」（版心）、次「中狂」（版心）、次「目錄」（版心「後目錄」）、次「遊畋失位」（挿絵）、次「後」（版心）、次万曆元年王希烈「帝鑑図説後序」、次慶長十一年（一六〇六）豊光寺積承兌「末」（版心）。版心題「前」「後」。

無刊記。印記「雲邨文庫」。朱墨筆書入あり。文政四年（二八二）墨筆識語あり。

本書は、中国古代から宋代までの君主の事蹟の中から善事八十一条、悪事三十六条を選び、一事ごとに挿絵及び解説を加えた帝王教育の書であり、江戸時代には為政者の必読書とされた。古活字版史上、初期の絵入り本であり、挿絵は当然整版である。狩野派は、この挿絵からよく画題を取った。慶長十一年に豊臣秀頼（一五九三～一六一五）が出版したもので、「秀頼版」「豊臣版」と呼ばれ、第六冊末の西笑承兌（一五四八～一六〇七。のち鹿苑僧録となる）の「末」で、秀頼の刊行に言及する。和田維四郎の手を経て東洋文庫に帰した。

(29) 群書治要五十卷 原欠巻第四第十三第二十

唐魏徵等奉勅輯 〔元和二年徳川家康〕銅活字印本 四十七冊 三A:111 岩崎文庫

双辺縦二〇・八cm横一五・四cm、有界八行十七字注文小字双行、双花魚尾黒口、無点。首魏徵等「群書治要序」、次「群書治要目録」、次「群書治要巻第一」、以下至巻第五十。版心題「群書治要」。無刊記。題簽題「群書治要」。印記「紀伊徳川／氏蔵板記」。

本書は、貞観五年（六三一）、唐の太宗の勅命で魏徵が総裁となり、經史子部六十八種の典籍から政治の要道を探録したもの。奈良時代に遣唐使によって日本にもたらされ、帝王学の書として尊重されたが、中国では宋初に亡んだ。東洋文庫蔵本は、徳川家康が駿河退隠後、以心崇伝（一五六九～一六三三）・林羅山（一五八三～一六五七）に命じて銅活字を用いて印行したもので、「駿河版」と呼ばれる。駿河版「群書治要」は、金沢文庫伝来の卷子本（宮内庁書陵

部藏)を底本として、元和二年(一六一六)に完成した。しかし本書の刷り上がりを持たずに家康が死去したため、下賜されることなく保管され、元和五年、駿河守徳川頼宣(一六〇二〜七一、家康の十男)の紀州転封により、銅活字とともに紀州に移された。現在、凸版印刷株式会社に銅活字三万七千九百七十九個が所蔵される。

(30) 仏説不増不減経一卷

北魏菩提流支訳 慶長十九年日本国大蔵都監古活字印本 一帖 三A一b133 岩崎文庫

無辺書型縦二五・九cm横每折九・五cm、無界每折五行十四字、無点。首「仏説不増不減経 羊／元魏北印度三蔵菩提流支訳」。第二紙以降、右端に「不増不減経 第幾張 羊」と刻す。刊記「甲寅歳(慶長十九年、一六一四)大日本国大蔵都監奉／勅彫造」(巻末)。千字文「羊」。題簽題「仏説不増不減経」(書貼)。印記「雲邨文庫」。巻首に「内藤虎次郎」と記した墨筆付箋、巻尾に「奈良筒井寛聖氏蔵大蔵経目録」の奥書を転記した墨筆付箋を添付す。墨筆書入あり。

本書は、三界・六道を流転輪廻する衆生の数に増減があるかという問に端を發して、如来蔵の思想について説いたもの。江戸初期、伊勢国常明寺の天台僧宗存が、京都の北野経王堂で印行したもので、「宗存版」・「北野経王堂版」と呼ばれる。高麗版大蔵経に倣って「日本国大蔵都監奉／勅雕造」の文言を入れた刊記が多く、後陽成院の勅によつたとの説がある。『大蔵目録』三巻をはじめ、百点近い折本を印行した後、その一切経印行は途絶したが、寛永元年(一六二四)まで袋綴じ本で天台典籍を印行していたことが確認されている。宗存版は、肉厚の黄紙に大型の活字で刷ら

れている。東洋文庫蔵本は、和田維四郎の手を経て東洋文庫に帰した。

(31) 摩訶止観科解十卷

隋釈智顛説 □欠名科解 慶長六至八年比叡山延暦寺東塔東谷月藏房真慶古活字印本 二十六冊 三A―b―51 岩

崎文庫

上下双辺左右单辺縦二一・七cm横一七・五cm、有界九行十九字、双花魚尾小黒口、無点、上部双辺間に科文あり。

首永泰元年(七六五)普門子「止観輔行伝弘決序」、次「摩訶止観科解卷第一之一」、以下至卷第十。版心題「止」。刊記「惟昔慶長六曆(辛/巳)十月日於比叡山延暦寺東/塔東谷月藏坊令刊摺之畢」(卷第一之三卷末)、「惟昔慶長七曆(壬/寅)三月日於比叡山延暦寺東/塔東谷月藏坊令刊摺之畢」(卷第二之三卷末。卷第三之三卷末作「六月」、卷第四之二卷末作「八月」、卷第五之四卷末作「九月」)、「惟昔慶長八曆(癸/卯)三月日於比叡山延暦寺/東塔東谷月藏坊令刊摺之畢」(卷第六之三卷末。卷第九之二卷末作「五月」)、「惟時慶長八曆(癸/卯)六月日於比叡山延暦寺/東塔東谷月藏房令刊摺之畢」(卷第十卷末)。印記「金集口」(墨印)。まゝ巻首に「乘実房」の墨筆書入あり。巻第十刊記の後に「雖点異字直可有見落者也/于時元禄三年十月七日 乘実房豪覚(六十才)朱筆識語あり。乘実房豪覚による朱墨筆書入あり。

本書は、天台宗の開祖智顛(五三八〜五九七)が天台宗の修行法である観心を体系的に説いたもので、天台教学の根本となる天台三大部の一つ。何者かによって科文と注釈が付されている。江戸初期に比叡山延暦寺で木活字を用い

て印刷されたもので、「叡山版」・「叡山古活字版」と呼ばれる。叡山版は、山内の三塔（東塔・西塔・横川）十六谷の子院・諸道堂で開版されたため、版式はまちまちであり、後のものほど活字が小型化する傾向にあり、慶長年間（一五九六～一六一五）は双辺、元和（一六一五～二四）以降は単辺・無辺が多い。東洋文庫蔵本は、慶長六年十月から八年六月にかけて東塔東谷の月蔵房真慶によって印行された。

〈覆古活字本〉

古活字版を覆刻した整版本を、覆古活字版、または古活字覆刻整版本と呼ぶ。古活字版の刷り本を版木に貼り付けて版下とし、そのまま彫板したもの。古活字版・覆古活字版の見分けは難しく、墨ののり具合や、文字同士の接触の具合等で見極めなければいけない。

(32) 列子虜齋口義二卷 \* 覆古活字本との比較資料として。

宋林希逸撰 慶長元和間古活字印本 二冊 三A1a124 岩崎文庫

双辺縦二〇・五cm横一四・七cm、有界九行十九字、双花魚尾小黒口、無点。首「列子虜齋口義卷上／虜齋林希逸」、以下巻下。版心題「列子」。無刊記。題簽題「列子口義」（書貼）。印記「縁覚寺」（墨消チ）「岡本藏書記」「閩魔庵／圖書部」「岡本藏書」「傍島」「玄／谿」「雲邨文庫」。朱墨筆書人あり。

本書は、戦国時代の思想家列御寇の思想を説いたもので、宋の林希逸（号虜齋）によって注が付されている。列御

寇は実在の人物かどうか疑わしく、様々な文献に伝えられた寓話が晋代にまとめられたと考えられている。東洋文庫蔵本はその古活字本。明治大正期の横浜の実業家岡本闈魔庵（名久次郎）の旧蔵で、和田維四郎を経て東洋文庫に帰した。

(33) 列子虞齋口義二卷

宋林希逸撰 寛永四年京都安田安昌谷膝亭抛慶長元和間古活字印本刊 四冊 III 13 | 803

双辺縦二〇・一cm横一四・五cm、有界九行十九字、双花魚尾小黒口、送返縦点。首「列子虞齋口義卷上／虞齋林希逸」、以下至卷下之二。版心題「列子」。刊記「崑寛永四曆歲次丁卯臘月吉旦／洛陽烏丸通大炊町／安田安昌新刊于容膝亭」(卷下之二末)。題簽題「列子」。印記「西□／周」「英王堂藏書」。卷上之一見返しに「共四冊 釈徳牛(花押)」、卷下之二末に「共四冊 徳牛(花押)」墨筆書入あり。朱筆書入あり。

(32) の覆刻本。原本を忠実に覆刻したのではなく、卷上第六十六丁裏で卷を改めて、以降を「卷上之二」(丁付「又六十六」)とし、卷下第四十七丁表第八行で卷を改めて、以降を「卷下之二」(丁付「又四十七」)とし、各卷一冊の四冊本として、寛永四年(一六二七)に刊行したもの。東洋文庫蔵本は、イギリスの日本語学者バジル・ホール・チェンバレン(一八五〇～一九三五)の旧蔵で、弟子上田万年(一八六七～一九三七)の手に渡り、昭和十三年(一九三八)、万年の子上田寿によって東洋文庫に寄贈された。

別表1【東洋文庫所蔵『永楽大典』リスト】

巻次	巻数	冊数	韻目	小韻	備考
卷五五四～五五六	3	1	一東239*	庸	
卷八四九～八五一	3	1	二支	詩	
卷一〇五六	1	1	二支	池	首闕
卷一一八八	1	1	二支	辞	周易繫辭
卷一一九二	1	1	[二支]	[辞]	零葉。周易繫辭
卷一二〇〇	1	1	[二支]	[辞]	零葉。周易繫辭
卷二二五四・二二五五	2	1	六模	壺	表紙裏に四庫全書纂修時の纂修官によるチェック表貼付。図多数
卷二二八二・二二八三	2	1	六模	湖	
卷二六一〇・二六一一	2	1	七皆65	臺	
卷五一九九～五二〇五	7	4	十二先 389-392	原	卷5205の3a3に黄絹貼付
卷五二六八	1	1	十三蕭	襖	
卷六八二六・六八二七	2	1	十八陽446	王	
卷七二三七・七二三八	2	1	十八陽626	堂	
卷七五一一・七五一二	2	1	十八陽755	倉	
卷九五六一	1	1	二十二覃13	南	河南布政司。図多数
卷一〇五三九・一〇五四〇	2	1	四濟	啓	卷10540の10a5に黄絹貼付
卷一〇八一二～一〇八一四	3	1	六姥	母	
卷一一四一二・一一四一三	2	1	十一産	眼	
卷一一五九八・一一五九九	2	1	十四巧	草	ジョージ・アーネスト・モリソン旧蔵。表紙に鉛筆サインあり
卷一一六〇二・一一六〇三	2	1	十四巧	藻	ジョージ・アーネスト・モリソン旧蔵。表紙に鉛筆サインあり
卷一一六一五・一一六一六	2	1	十四巧	老	
卷一一八四八・一一八四九	2	1	十八養	享	
卷一三〇一九	1	1	一送389	宋	零葉。題簽卷5549に作る
卷一三一三九・一三一四〇	2	1	一送450	夢	
卷一四九四七	1	1	六暮	婦	
卷一五九四八・一五九四九	2	1	九震216	運	
卷一九四一六～一九四二六	11	5	二十二勘 10-14	站	
合計	63	34			

※「韻目」欄の韻目に付した算用数字は、表紙の右上に貼付された題簽に記された韻目ごとの冊次である。

別表2 【『四庫全書』の四部分類】

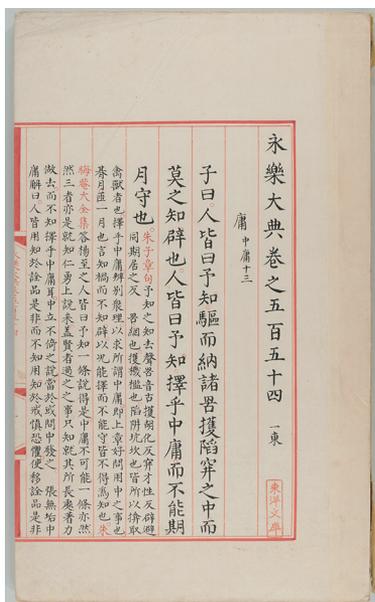
部	類	部	類
經部	易類	子部	儒家類
	書類		兵家類
	詩類		法家類
	礼類		農家類
	春秋類		医家類
	孝經類		天文算法類
	五經総義類		術数類
	四書類		芸術類
	楽類		譜録類
	小学類		雑家類
	史部		正史類
編年類			小説家類
紀事本末類			釈家類
別史類		道家類	
雑史類		集部	楚辞類
詔令奏議類			別集類
伝記類			総集類
史鈔類			詩文評類
載記類			詞曲類
時令類			
地理類			
職官類			
政書類			
目録類			
史評類			

【主な参考資料】

- 東洋文庫日本研究委員会『岩崎文庫貴重書書誌解題 I』（東洋文庫、一九九〇年三月）  
井上宗雄等編『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九三年三月）  
東洋文庫日本研究委員会『岩崎文庫貴重書書誌解題 III』（東洋文庫、二〇〇〇年三月）  
東洋文庫日本研究班『岩崎文庫貴重書書誌解題 IV』（東洋文庫、二〇〇四年三月）  
會谷佳光「漢籍善本紹介 東洋文庫（1）」『同（5）』（『新しい漢字漢文教』第54～58号。二〇一二年五月～二〇一四年五月）



(1) 唐人雜鈔 第52~57行



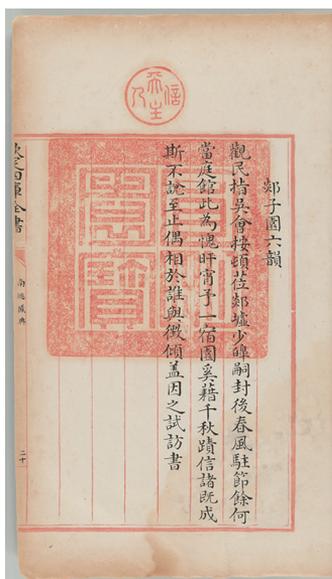
(2) 永樂大典 卷544. 1a



(2) 永樂大典 卷544. 表紙



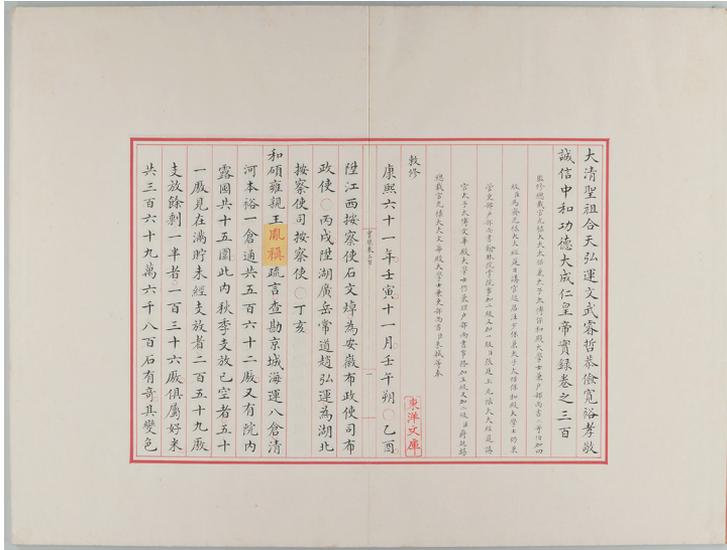
(3) 外戚事鑑 卷1. 4b~5a



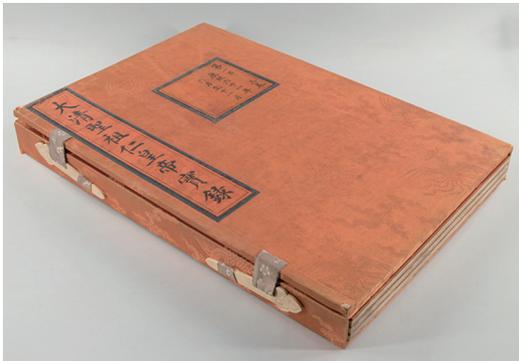
(4) 南巡盛典 卷22. 20a



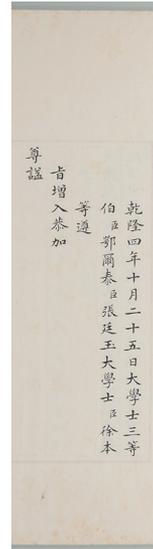
(4) 南巡盛典 卷20.1a



(5) 康熙帝実録 卷300.1a



(5) 康熙帝実録 卷298～300を収める帙の外観



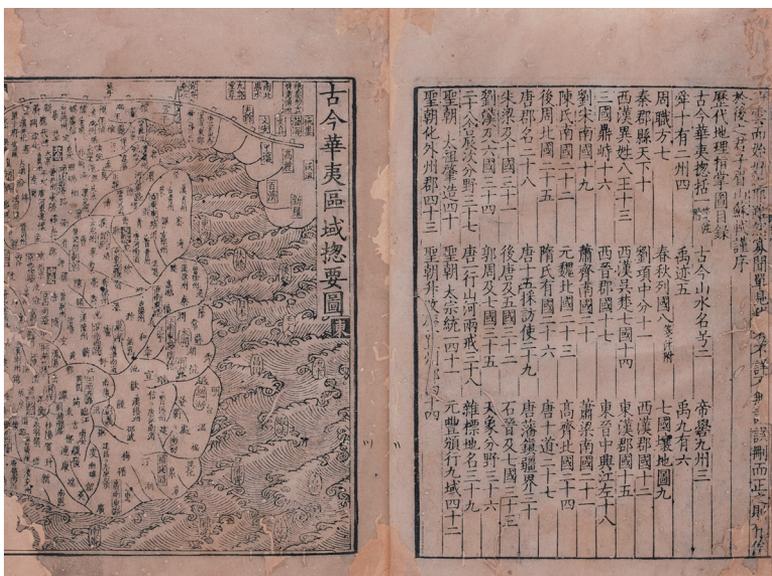
(5) 康熙帝実録 卷300末の副葉

此尊即說偈言  
 色聲香味觸 及第六諸法 愛念適可意  
 世間唯有此 此是最惡貪 能繫着凡夫  
 超越斯等者 是佛聖弟子 度於魔境界  
 如日無雲翳  
 時魔波旬作是念沙門瞿曇已知我心內懷  
 憂感即設不現  
 性空佛  
 雜阿含經卷第三十九  
 拈六節尾蓋  
 詳對經弟子黃端  
 詳對經沙門道  
 流

(6) 增阿含經 卷39. 卷尾

福州長壽寺院住持傳法沙門 智賢 謹集 錄卷為  
 今上皇帝祝延 聖壽開那會 徐同 稔 程 陸 陸 造  
 大藏經印板計五百餘函 時經三至十月 日 題  
 雜阿含經卷第三十九  
 宋 天竺 三藏 求 那 跋 闍 羅 譯  
 如是我聞一時佛任波羅捺國鹿野苑中  
 時世尊晨朝著衣持鉢入波羅捺城乞食時  
 有異比丘著衣持鉢入城乞食於其路邊住  
 一樹下起不善覺以依惡貪念時世尊見彼  
 比丘住一樹下以生不善覺依惡貪嗜而告  
 之曰比丘比丘莫種苦種而發生臭汗漏流  
 出若比丘種苦種子自發生臭汗漏流出者

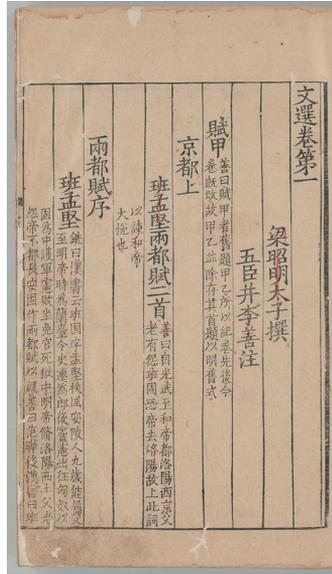
(6) 增阿含經 卷39. 卷首



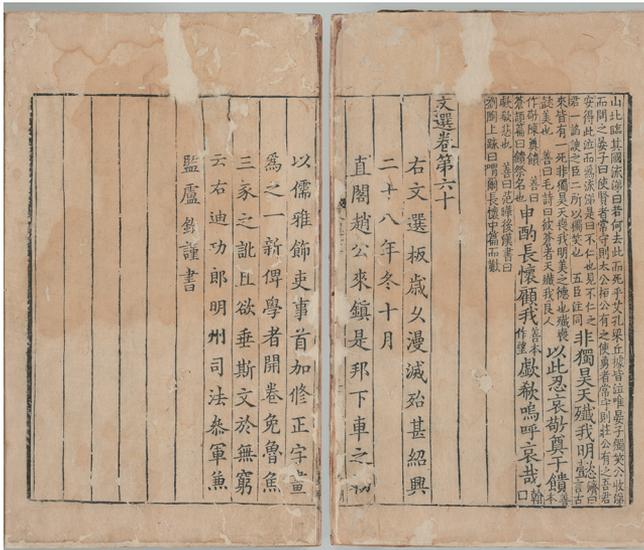
(7) 歷代地理指掌圖 序末·目錄·古今華夷區域總要圖



(8) 文選 儉鈍箱



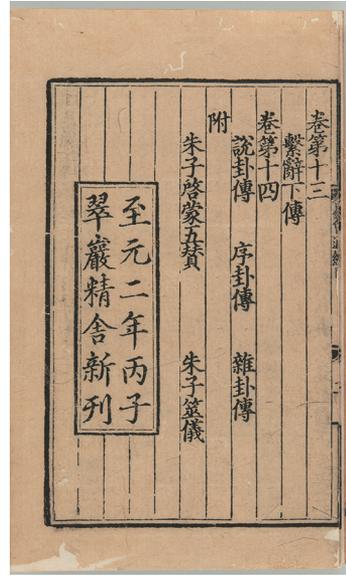
(8) 文選 卷1.1a



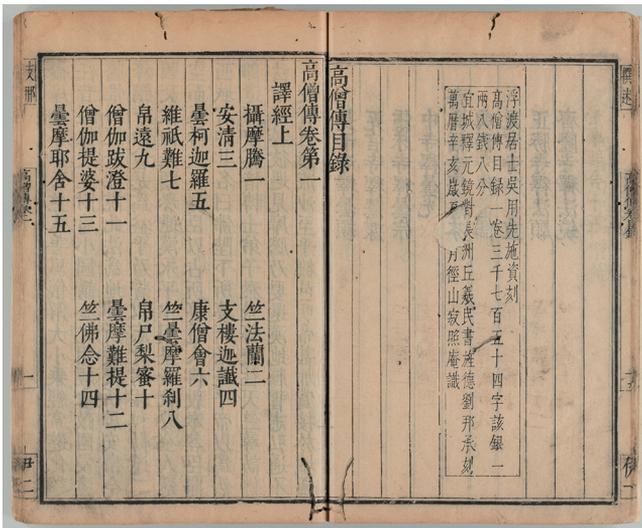
(8) 文選 卷60末. 紹興28年跋



(9) 周易經伝集程朱解附録纂註 卷1. 1a

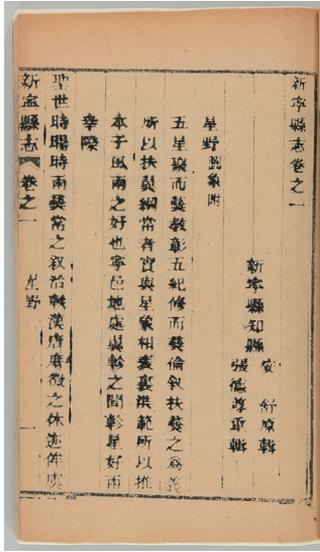


(9) 周易經伝集程朱解附録纂註 総目末の刊記

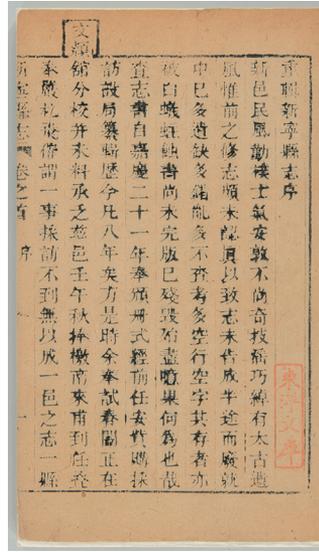


(10) 高僧伝 目録末の刊記・巻1. 1a

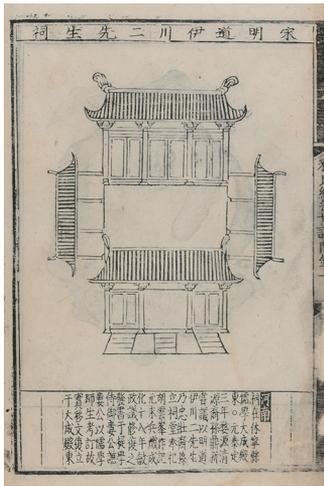




(13) [道光] 新寧縣志 卷1.1a

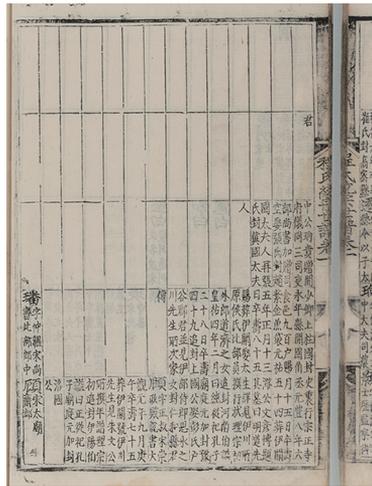


(13) [道光] 新寧縣志 卷首.1a

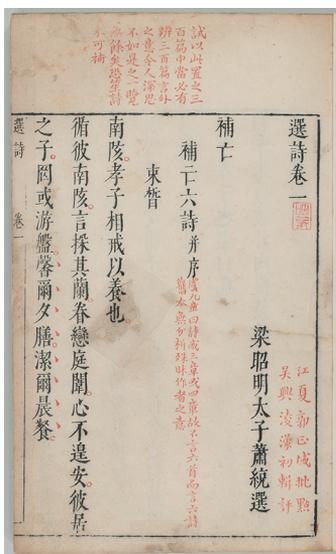


五三

(14) 新安程氏統宗世譜 附錄上 「宋明道伊川二先生祠」



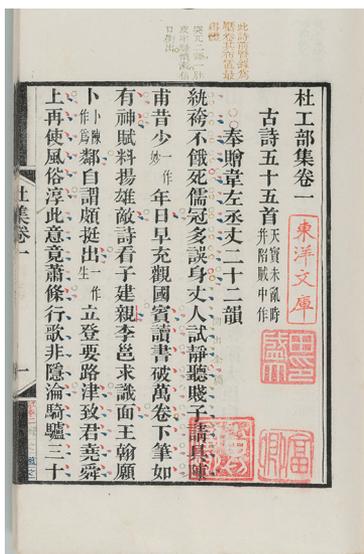
(14) 新安程氏統宗世譜 卷一中山博野派三十三世 程顯·程顥



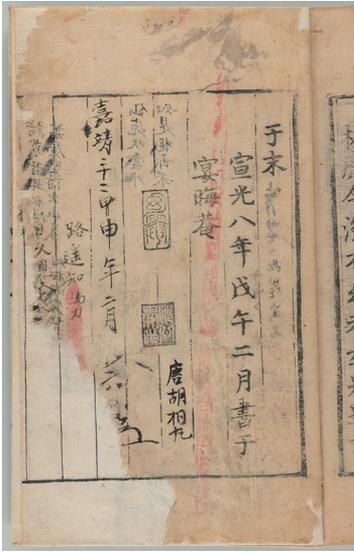
(16) 選詩 卷1.1a



(15) 新安名族志 「新安名族志前卷」1a



(17) 杜工部集 卷1.1a



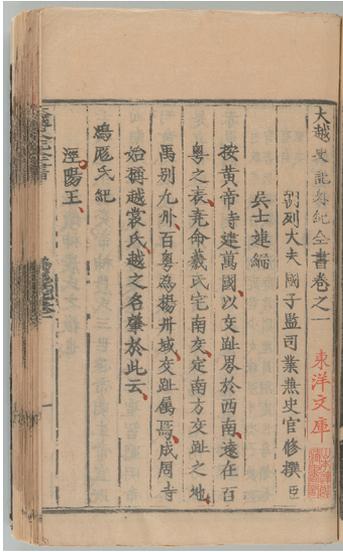
(18) 禪林宝訓 卷下末の宣光八年积混修跋



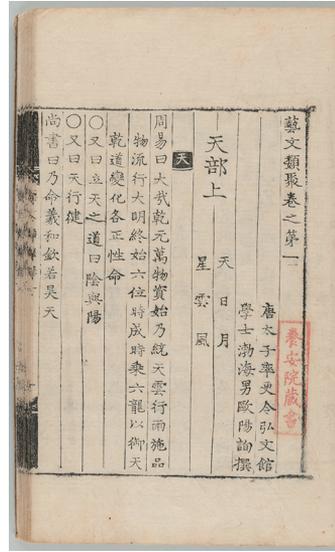
(18) 禪林宝訓 卷上. 1a



(19) 芸文類聚 第1冊見返しの内賜記と卷頭の「宣賜／之記」印



(20) 大越史記外紀全書 卷1. 1a



(19) 芸文類聚 卷1. 1a



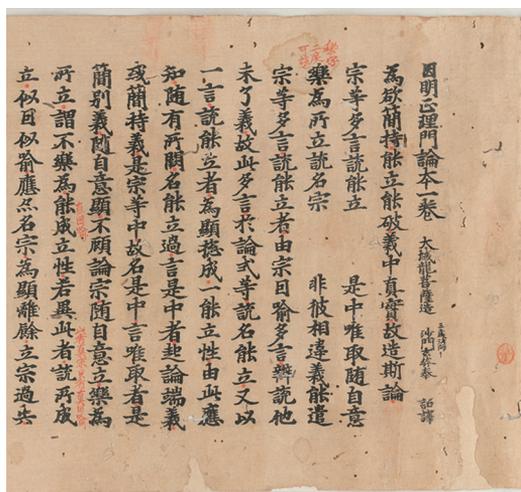
(21) 地志類 外觀。越南本の特徴的な装訂が施されている



(21) 地志類 卷1. 1a



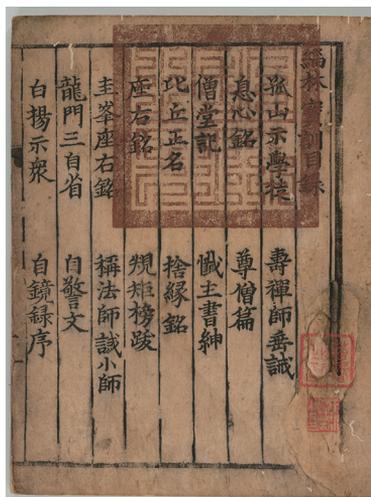
(22) 因明正理門論本  
卷末の刊語



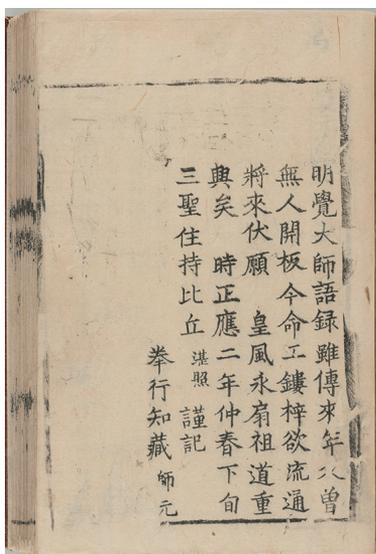
(22) 因明正理門論本 卷首



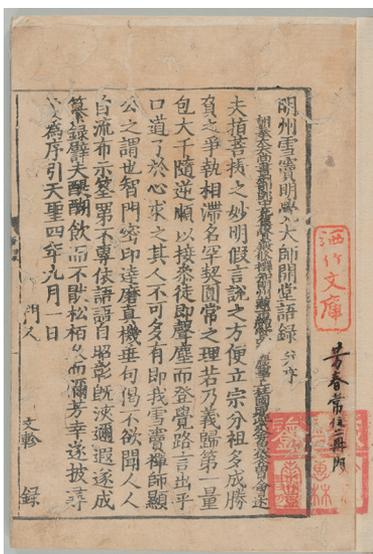
(23) 緇林寶訓 卷末「太宰／大貳」



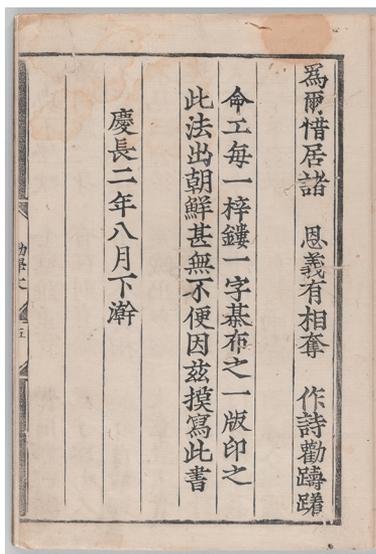
(23) 緇林寶訓 目錄1a「日本／国王／之印」



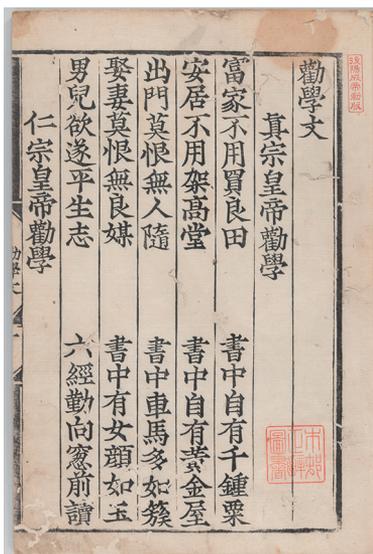
(24) 雪竇明覺大師語錄 下冊頌古集29a 刊記



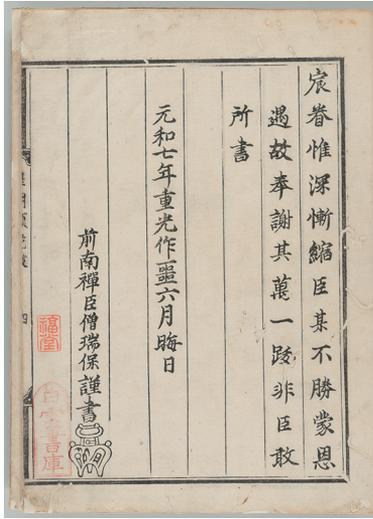
(24) 雪竇明覺大師語錄 上冊開堂語錄 1a



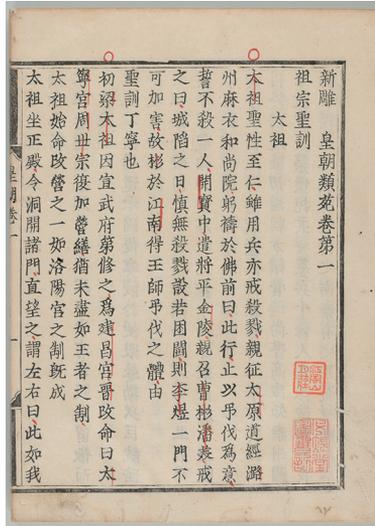
(25) 勸學文 卷末刊記



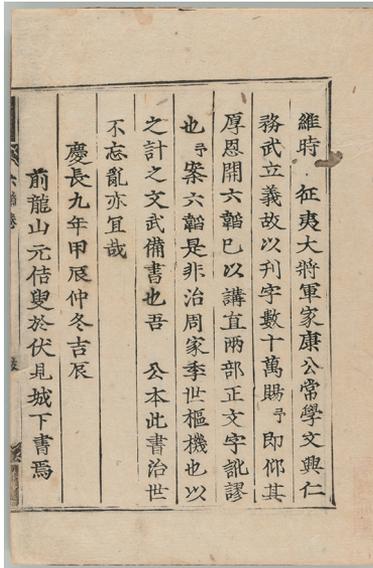
(25) 勸學文 1a



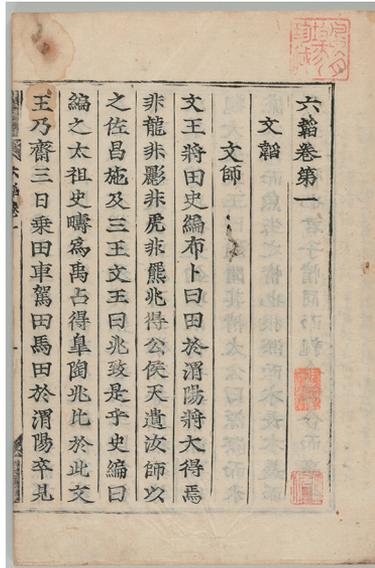
(26) 新羅皇朝類苑 元和7年跋



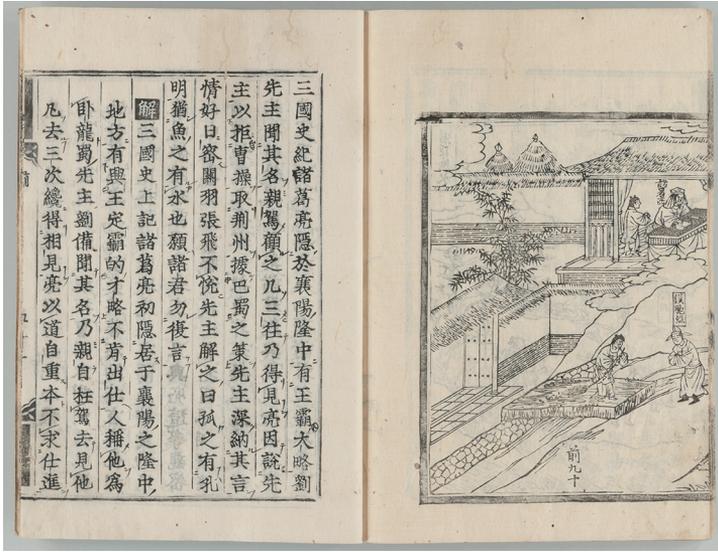
(26) 新羅皇朝類苑 卷1.1a



(27) 六韜 慶長9年跋



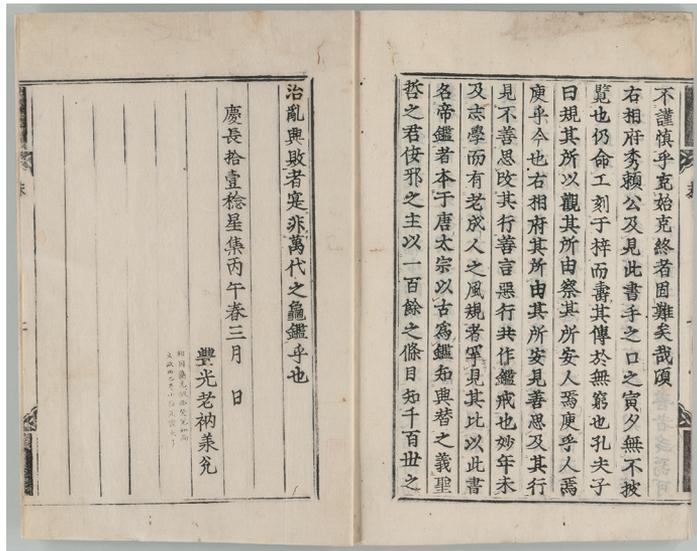
(27) 六韜 卷1.1a



三國史記諸葛亮隱於襄陽隆中有王霸大略劉  
先主聞其名親駕顧之凡三往乃得見亮因說先  
主以拒曹操取荊州拔巴蜀之策先主深納其言  
情好日密關羽張飛不悅先主解之曰孤之有孔  
明猶魚之有水也願諸君勿復言

三國史上記諸葛亮和隱居於襄陽之隆中  
地方有與王定霸的才略不肯出仕入稱他為  
卧龍蜀先主劉備聞其名乃親自枉駕去見他  
凡去三次纔得相見亮以道自重本不求仕進

(28) 帝鑑図説 三顧の礼の場面

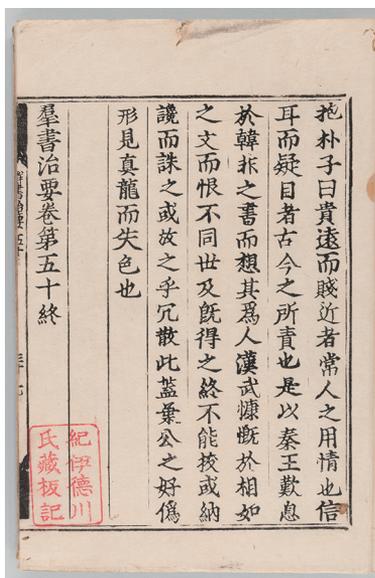


不謹慎乎竟始克終者固難矣哉頃  
右相肝秀頼公及見此書手之口之寅夕無不披  
覽也仍命工刻于梓而壽其傳於無窮也孔夫子  
曰規其所以觀其所由察其所安人焉廋乎人焉  
廋乎今也右相府其所由其所安見善思及其行  
見不善思改其行善言惡行共作鑑戒也妙年未  
及志學而有老成人之風規者罕見其比以此書  
名帝鑑者本于唐太宗以古為鑑知興替之義聖  
哲之君伎邪之主以一百餘之條日知千百世之

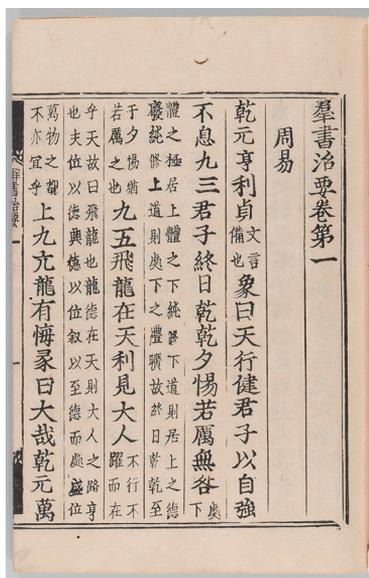
治亂興敗者是亦萬代之龜鑑乎也

慶長拾壹檢星集丙午春三月 日  
豐光老衲兼允

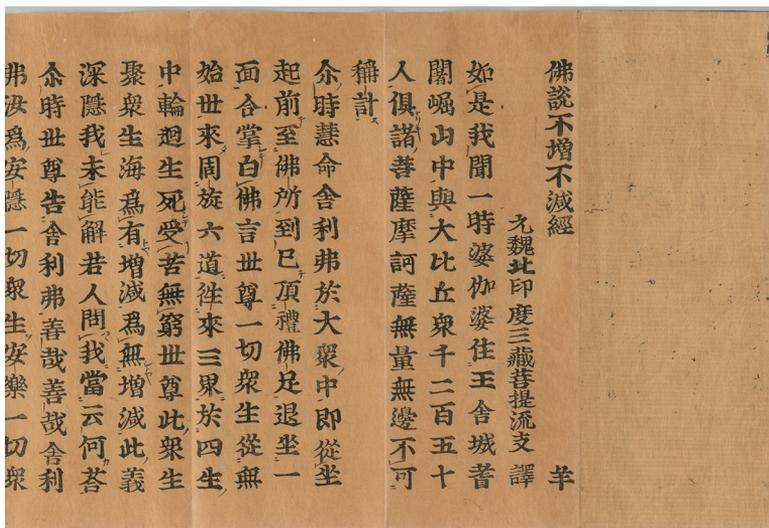
(28) 帝鑑図説 慶長11年跋



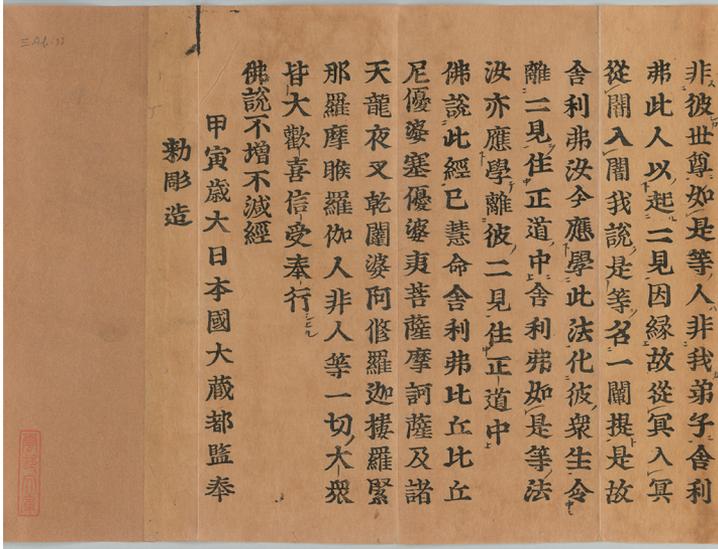
(29) 羣書治要 「紀伊德川／氏藏板記」



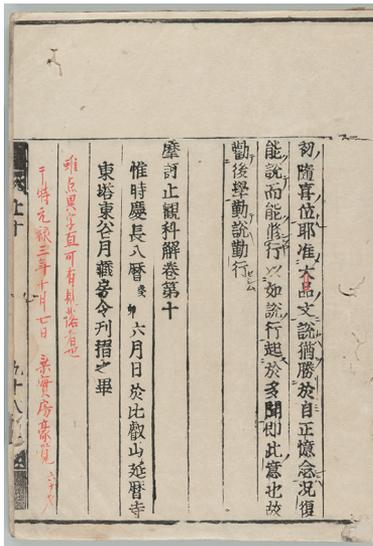
(29) 羣書治要 卷1.1a



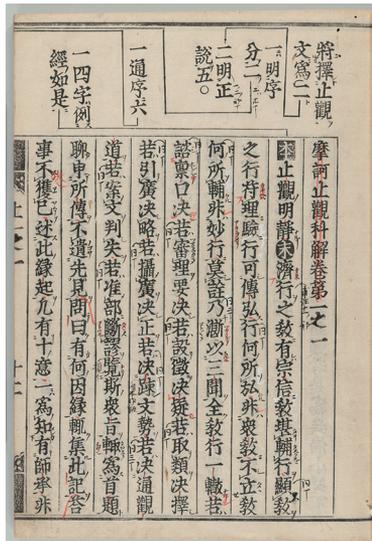
(30) 佛說不增不減經 卷首



(30) 仏説不増不減經 卷末の刊記



(31) 摩訶止觀科解 卷10卷末の刊記



(31) 摩訶止觀科解 卷1之1. 1a



(32) 列子虛齋口義 卷下. 47a



(32) 列子虛齋口義 卷上. 1a



(33) 列子虛齋口義 (覆古活字本) 卷下之2. 又47a



(33) 列子虛齋口義 (覆古活字本) 卷上. 1a